



### モンターヌスのもう一つの富士山図

富士山を描いた図を掲載した最初の西洋の書物と考えられるモンターヌス『東インド会社遣日使節紀行』（1669年刊）から、前号に続いて、富士山図をもう一点紹介する。この図で描かれている火山は、同書における解説と照らし合わせると、「ウスルブラマ」であることが分かった。その説明によると、「尾張」にある山とされる。しかし、解説を読み進めると、この山は「計り知れないほどの高さ」を有しており、17世紀当時には山頂火口から絶えず噴煙が上がっていると記されていることから、この図版は「尾張にある山」ではなく、「富士山」を表現しているものと推定できる。少なくとも山の姿は富士山によく似ている。なお、火山が噴火した状態で描かれているのは、モンターヌスの想像力の産物である。というのも、17世紀の富士山については、噴煙は上がっていたようであるが噴火したという記録はないからである。

日文研所蔵外書（解説：フレデリック・クレインス准教授）



# 日友研

— エッセイ —

倉本一宏 梅花の宴 2

荒木 浩 基礎領域研究「中世文学講読」由来—私的回想を兼ねて 8

孫 江 「際」について 13

— センター通信 —

江上敏哲 図書館が日文研と世界をつなぐ—OCLC他による海外連携と図書館サービス 18

稲賀繁美 Modern Japan in Comparative Imagination 22

An Interdisciplinary Conference at Durham University, 9-10 May, 2019 参加報告 22

共同研究 28

基礎領域研究 52

彙報 54

所員活動一覧 69

エッセイ

## 梅花の宴

倉本一宏

新元号「令和」が発表され、新天皇が即位し、国内は奉祝ムードとなって、まことにご同慶の至りである。ここで少し、新元号の基になった「梅花の宴」当時の政治情勢について説明しよう。詳細は一年前に「平城の都と万葉集」とくに大伴旅人をめぐって」という論文で述べたものである（古橋信孝編『万葉集を読む』吉川弘文館、二〇〇八年）。

神亀四年（七二七）、左大臣の長屋王と親しかった大伴旅人は、大宰帥として筑紫に赴任させられた。長屋王に対する藤原四子の反撃の一環として、王の近辺から遠ざけられたものときさされている。

翌神亀五年（七二八）四月、旅人は京から伴った妻大伴女郎を喪った。神亀六年（天平元年、七二九）二月、長屋王の「謀反」が密告され、長屋王一族は葬られた（倉本一宏『奈良朝の政変劇 皇親たちの悲劇』吉川弘文館、一九九八年）。

旅人は筑前守として赴任していた山上憶良たちといわゆる「筑紫歌壇」を形成し、酒と歌（と遊女）に憂さを晴らした。彼の周辺には同じく筑紫に赴任していた地方官人たちが集まり、

盛んに宴飲と作歌を行なった。平城京の華やかさを謳歌したものとされる、

あをによし奈良の都は咲く花の薫にほふがごとく今盛りなり

(奈良の都は咲く花の美しく薫るように、今がまっ盛りである。)

も、彼らの情念の結集したものと解することができる。旅人も、

わが盛りまたをちめやもほとほとに奈良の都を見ずかなりなむ

(私の年の盛りが再び返ってくることもあるだろうか。もしかして奈良の都を見ずに終わってしまおうだろうか。)

と詠うのであった。ひょっとしたら都を見ずに終わるのではないかという不安を、我々は笑うわけにはいかない。

次いで巻第五に載せられているのが、天平二年(七三〇)正月一三日に旅人の館で開かれた「梅花の宴」である。ここに集って歌を詠んだのは、大宰大貳紀男人以下、三二人の地方官人である。

前年に長屋王は葬られており、旅人にも中央復帰の観測が生じていた。もしかしたら二度と都に帰ることはないかもしれないと心の中では感じている下級官人たちとの間には、微妙な温度差があった。

この宴の序として、紀男人が後漢の張衡の『帰田の賦』を踏まえて作ったものが、このたび

の新元号の出典とされている。当時の日本人が中国の古典から引用して漢文を作るのはよくあることなのだが、かといってこれを「国書」というのも、いささか違和感がある。

加えて、「令」と「和」の取り方が不自然だとか、奈良時代だったら「りょうわ」と訓むのではないとか、まだ他にも考えるところはたくさんあるのだが、ここでは言わないでおこう。さて、旅人はこの年の一月に大納言に任じられ、中央に上ることができた。筑紫に残される地方官人たちは、饞別の宴を張って旅人を送り出した。

憶良公館の部屋とされる「書殿」で開かれた饞酒の日の歌における、

天飛ぶや鳥にもがもや都まで送りまをして飛び帰るもの

(鳥にでもなれたらなあ。都までお送り申し上げて、飛び帰って来るものを。)

ひとつもねのうらぶれ居るに竜田山み馬近付かば忘らしなむか

(皆がうち萎れているのに、竜田山にお馬が近づいたら、嬉しさに後に残った皆のことなどお忘れになってしまうだろうか。)

というのが(巻第五―八七六―八七七)、残された者たちに共通の思いではなかったか。鳥にでもなつて都までお送りしたい(そうまでしても都に行きたい)という詮無い望み、竜田山(河内と大和の国境)に近付いたら我々のことなんて忘れてしまうのだからという屈折は、何とも悲惨である。続く歌(巻第五―八七九)に詠み込まれている、

万代にいましたまひて天の下奏したまはね朝廷去らずて

(万年の後までもおすこやかに、天下の政治を陛下に奏上なさって下さい。朝廷を去らずに。)

のうち、「天下の政治」というのも、政治の根幹である人事、つまり我々を都に上らせるよう、天皇に奏上して下さいとの意かとも考えてしまう。

旅人は、水城で涕きながら袖を振って別れを惜しんでいる児島なる「遊行女婦」に向かつて、

ますらをと思へる我や水荖みずくさの水城みづきの上に涙拭なみだぬぐはむ

(丈夫と思う私が、水城の上に袖で涙を拭くことだろうか。)

と歌いかけ(巻第六―九六八)、筑紫を後にしたのであった。

しかしそれは、長屋王はすでになく、藤原四子の支配する都なのであった。『続日本紀』で旅人のことを「多比等」と記述する史料があるのも、本来は「史」であった藤原ふひとが、「不比等」つまり比べて等しい者がいないという字が用いられていることと裏返しうらがの立場に置かれたのであった(「多比等」というのは、比べたらどこにでもいる奴、という意味か)。

その後、上京した旅人に対して、満誓が贈った歌に対する返歌は、

ここにありて筑紫やいづち白雲のたなびく山の方にしあるらし

(ここ大和にあって筑紫はどちらの方角か。きっと白雲のたなびくあの山の方角なのだろう。)

というものであった（巻第四―五七四）。これを贈られた筑紫の官人たちは、「筑紫はどっちだっけ」などという歌を、どのような思いで聞いたことであろうか。

そして旅人は、天平三年（七三一）七月に死去した。

その直前、七一歳の憶良は、天平二年（七三〇）一二月、旅人に次のように訴えた。

天離る鄙あまながに五年住まひつつ都のてぶり忘れえにけり

（鄙に五年住み続けて、都の立ち居ふるまいを忘れてしまいました。）

かくのみや息づきをらむあらたまの来経きへ行く年の限り知らずて

（こんなふうにはかり溜息をついていることでしょうか。来ては過ぎて行く年の果てを知らないで。）

我が主のみ霊たま賜ひて春さらば奈良の都に召上げたまはね

（あなたさまの御かげを蒙って、春になったら奈良の都に呼び戻して下さい。）

地方に五年もいて都の振舞いも忘れてしまった、過ぎ行く年の限りも知らない、あなたのご愛顧で春になったら都に召し上げて下さい、という三首は、悲惨を通り越して、むしろ滑稽ですらある。筑前守という地位ですら、その門地からすれば異数の出世であったはずなのに、彼はあくまでも中央復帰こそ官人のあるべき姿と思っただけである。

その甲斐あってか、天平四年（七三二）ごろに中央に復帰した憶良であったが（官職は不明）、翌天平五年（七三三）、重態に陥った。見舞いに訪れて容体を尋ねた藤原八束（後の真楯）の使・河辺東人に返事をし終わった憶良は、涙を拭い悲嘆して、絶唱（巻第六―九七八）

を口ずさんだ。

土そのこやも空かなしくあるべき万代よろづよに語り継ぐべき名は立てずして

(男と生まれた身として無為に終わってよいものか。後世永く語り継ぐに足る英名を立てることなく。)

微官のままに終わった憶良としてみれば、「貧窮問答の歌」(巻第五―八九二)をはじめとする自分の歌が『万葉集』に収められ、歌人としての名がはるか後世にまで語り継がれようなどとは、夢にも思わなかったに違いない。それは筑紫とともに歌を詠んだ他の官人たちにとっても、同様の思いであったはずである。

平成の時代は、近代史上初めて、戦争の無かった時代であった。前近代には対外戦争はほとんどなく、内戦も少なかった日本の、これが本来の姿なのであろう。ただ、平成日本は幾多の大災害に見舞われた。新しい時代は、戦争はもちろんのこと、災害も無い時代であることを願って已やまない。

(国際日本文化研究センター教授)

## 基礎領域研究「中世文学講読」由来―私的回想を兼ねて

荒木 浩

大学の内外で働くようになって、三〇年以上が過ぎた。時代はいつしか何周もめぐり、似て非なる風景のどこかで、迷子になってしまふこともしばしばだ。先日も、およそ文系とは無縁のとある大企業に勤める高校時代の友人から、「基礎的教養」や「人間力」の涵養を謳った「教養基礎講座」での講演を頼まれて驚いた。リベラルアーツ重視が会社の方針だという。

隔世の感がある。私が愛知の県立大学から大阪大学の教養部に転動した一九九二年は、前年のいわゆる大学設置基準の大綱化を承け、教養部廃止の嵐が吹き荒れていた。人文・社会・自然、外国語、体育という、高校の続きのようなものをまた二年間もやるの？せつかく大学に入ったのだから、早く専門がやりたい……。そんな学生の倦怠もさることながら、旧制高校の歴史を引きずる制度の中で、教える側にも、専門教育の学部との間に存する、教育対象と内容、また処遇などへの不満があった。ほとんどの大学で、あっという間に教養部がなくなっていく。そして大学院重点化へ。法人化につながる毒まんじゅう……。でもあったか。

大阪大学では、当初、教養部独立案が検討されたが、はやく一九七四年に、教養部から言語文化部が独立している。大綱化直前の平成元年（一九八九）には、言語文化研究科という大学院も設置され、二年後には博士課程も出来た。教養部に語学の教員はいない。教養学部としてジュニア、シニアを担当していた東大や、総合人間学部、人間・環境学の大学院を作った京大

とは状況が異なる。単独の学部化には限界があった。専門課程へ、という所属教員の希望もあり、いつしか教養部解体と教員の各学部分属が決まった。

当時の教養部は文字どおりの「教授」会で、赴任早々の助教授だった私には、出席の義務も権利もない。その代わり、若手だからとの理由で、教養部内の改組委員会、分属案が決まってからは文学部との協議会へ、と駆り出された。私が日文研へ転任する時の研究科長だった江川温氏、また日文研の小松和彦所長は、当時文学部側の委員であった。お二人とも助教授で、定期的な会合で議論を重ねた。今となっては懐かしい思い出である。教養部所属はわずか二年。九四年に文学部へ移籍となった。

教養部では「国文学」の通年科目を三コマか四コマ、年度ごとに、教授と交代で担当する。助教授には文学部への出講義務はない。「国文学会」という同窓会と、年にいくどかある卒論・修論発表会や学科旅行で文学部の国語国文学科に赴き、専門課程の学部生や院生と交流した。研究室は、イ号館という、阪大でもっとも古い建物の三階にあった。高台の上に立つ旧制浪速高等学校時代の歴史的建造物である。学部へ向かうときは、下界に降りる趣で、ちょっと愉快だった。後に大阪大学会館となり、今では阪大豊中キャンパスの顔である。

時には屋上（建物は五階建て）に上がる。そこはかつて国文学者の風巻景次郎が、昭和二六年（一九五二）一〇月一〇日付で、夫人へ「阪大（浪高）の屋上から見た大阪平野の美しさ——楽しんで居ります」と書き送った場所だ。ちなみに、その八年後、風巻が最後の講演を行ったのが、私の阪大の前任教、愛知県立大学（女専を経て当時は女子大）である（『風巻景次郎全集』所載の日記より）。

なぜこんな昔話を書いたかといえば、このイ号館屋上手前の五階の部屋で、教養部時代に開

いていた基礎ゼミが、日文研の基礎領域研究「中世文学講読」の源流だからである。教養部の担当科目は、講義の他に、国文学SⅠ（一年生対象）、同SⅡ（二年生対象）という基礎ゼミ科目があり、文系学部 of 学生と、少人数でゆったり古典作品を読むことが出来た。二年生のSⅡになると、かなり深い議論も出来る。文学部の専門課程に進んだ学生が来た時代もあったようだが、私の若く短い教養部在籍では、十分な貢献はできなかった。赴任の年の国文学SⅠでは『今昔物語集』を読んだ。当時の出席者の幾人かは、現在、東洋史や日本文学などの専門家として、大学の一線で活躍しておられる。ささやかな喜びである。

教養部の解体と前後して、研究室は、共通教育棟という、白い豆腐状の平凡で窮屈な設置基準下の建物へと遷った。科目名は変わったが、一、二年用の基礎ゼミ科目は継承され、九四年には「国文学講読SⅠ」という科目となる。かねてより興味があった『方丈記』の英訳を取り上げた。まだ語学を学んでいる学生さんには、訓読注的な精読より、英語と比較しながら、短編の名作『方丈記』を読むのがいいだろうと考えたのである。そこで鴨長明自筆という所伝の大福光寺本の影印本、翻刻と並べて、MS-DOSのコンピュータで入力した夏目漱石、南方熊楠の英訳を対比したプリントアウトを配り、テキストとした。

私の授業も下手だったのだろう。国文好きの学生は、あまり英語には興味がないらしく、登録は七名ほど。最後は二人の出席になった。もっとうまくやれたのではないか、という後悔が残った。

その後、大学院重点化で大学院専門科目の担当が増えたが、講義は、学部、修士、博士と合同でやることができた。私の中で『源氏物語』に関心が集中していた頃で、『源氏』の名前を掲げて講義をすると、専門課程なのに、大講義室がいっぱいになる。一方、留学生が増え、海

外の研究との連結のようなことがリアルになった。英語圏の研究のフォローが必要、という切実感もあり、研究会をやりませんか、と大学院生に慫慂されて、「英語論文を読む会」というのを隔週で開催することになった。The Kagero Diary の解説文や、*Inventing the Classics: Modernity, National Identity, and Japanese Literature* の諸編などから読み始めた。やってみると学生は予習がしんどそうなので、私が読んできて、ぼそぼそと解説する形式が定着した。ならばいっそ、講義として正式に開講しよう。そう考えてシラバスに上げたら、前年一〇〇人を超えていた受講者が、一〇分の一ほどになった。一八〇分の隔週開講にして、ゼミのような一年を過ごした。私の阪大での英語論文の講義は、それが最初で最後である。

愛知、大阪と過ごしてみても、どうも教育や講義は苦手だという意識が強くなったことも一因となり、現職に転任すると、総合研究大学院大学文化科学研究科国際日本研究という、長い名前の大学院があった。ネガティブではないが、ポジティブでもない関わりの中で三年が経ち、留学生としてゴウランガ・ブラダンさん（現日文献機関研究員）が在籍することになった。『方丈記』の英訳（夏目漱石他）を中心的な研究対象とする、という。私自身、二〇一二年の「方丈記八〇〇年」イベント（『方丈記』は建暦二年、西暦一二二二年に成立）への関わりもあった。『方丈記』をテーマとして、久しぶりにゼミ形式の授業をやってみようかと、「中世文学購読」という基礎領域研究を開始したのである。

古いファイルを開けて参照し、本文と英訳を交えながら『方丈記』を二年で読み上げた。『方丈記』のあとは『徒然草』に続けた。ちょうど拙著『徒然草への途―中世びとの心とことば』の整理をしていたところである。基礎ゼミなので、シニアの外国人研究者にはあえて声をかけず、関心を抱く方が、折々に参加する。外部からの受講者もあり、現在では五〜八人ほど。

阪大時代と同じく、隔週で開講している。二二〇分だが、しばしば延長して、三時間近くになることもある。毎週でないとも継続性の担保が難しいが、一回ごとの燃焼度は高くなる気もする。基礎領域研究では、作品を読みながら、できるだけ毎回、自分の書いた新しい論文やエッセイを提示し、関連学会の情報など織り込みながら進めている。発表前の新ネタを話してみたり、話題の本があれば、取り上げたりもする。今年度は、二人の院生を迎え入れたこともあり、よりゼミに近づけ、大学院生の研究整理や発表、若手研究者の学会発表準備などを軸としている。継続して一作品を読むことは、ひとまずお休みだ。

もっとも、来年の春に『徒然草』をめぐる大きなシンポジウムがありそうなので、秋後半から来年度初めには、また『徒然草』ゼミが復活するかも知れない。『徒然草』は、小川剛生『兼好法師』（中公新書、二〇一七年一月）の刊行で、作者論に重大な問題提起がなされた。学界の外でも話題になり、教育界でも対応を迫られている。実は、元になった小川氏の論文は、二〇一四年に出ている。基礎領域研究「中世文学購読」では、小川論文が出てすぐに、その分析を行った。

そういう時には、中国ならすぐに専門家を集めて、議論を重ね、統一見解を出しますよ。日本ではしないのですか。そうおっしゃって、強いモチベーションを与えてくれたのは、滞在の一年間、毎回基礎領域研究に参加してくださった、南開大学の劉雨珍教授である。シンポジウムが実現すれば、期待に応えて、何とかいいものにしなれば、とご恩を受け止めている。

（国際日本文化研究センター教授）

## 「際」について

孫 江

「際」という漢字は、本来、壁と壁の間の隙間を意味する。そこから「際」の空間的・時間的意味合いが生まれる。空間的な意味での「際」は、「国際」、「学際」のように二つのものの間の距離を指し、時間的な意味での「際」は、「際会」、「今際」のように「時」や「モーメント」を指す。現代中国語と日本語の「際」の使用例を比較すると、日本語のほうが圧倒的に多い。

今年一年間、私は外国人研究員として国際日本文化研究センターを訪問している。日々過ごすなかで、よく目に入るのが「国際」の二文字である。今日の意味で使われている「国際」は一九世紀半ばに作られた言葉である。それまでは「万国」という語がよく使われていた。箕作麟祥訳『国際法 一名万国公法』の序文に、「仔細ニ原名ヲ考フル時ハ国際法ノ字允当ニナルニ近キカ故今改メ国際法ト名ク」と「万国公法」を「国際法」に改めた理由が述べられている。地理的空間であれ、文化的空間であれ、自分の研究を「国際」という空間のどこに位置づけるかによって、見えてくるものは大きく異なる。

戦後、ヨーロッパを中心とするこれまでの「世界史」叙述の枠組みを打ち破るため、多くの理論が生み出された。その中で今注目を浴びているのは、中心と周縁、ヨーロッパと非ヨーロッパの二項対立的な歴史叙述を標的とするグローバル・ヒストリーであろう。国民国家の壁を取り払い、ヒトやものの移動に焦点を当てることで、従来見逃されてきた歴史の多くの側面

が浮き彫りにされてきた。しかし、その一方で、グローバル (global) という形容詞が象徴するように、その研究の対象や領域、そして分析の手法は必ずしも確立されておらず、現実に国民国家が存在する以上、グローバル・ヒストリーが目指す新しい歴史叙述は、結局のところ、ヨーロッパ中心の叙述から脱却することは困難であろう。むしろ自己と他者の距離を確認し、その相互関係に着目するグローバルゼーション (globalization) —— グローバリゼーション (地球一体化) とローカリゼーション (地域化) とが合わさった造語——のほうが示唆的だと感じる。そこで私は、「概念史の文化的転回」を唱え、東アジアにおける近代知の再生産プロセスの解明に取り組んでいる<sup>二〇</sup>。

概念史研究の最大の眼目は、それぞれの地域や時代の概念を手がかりに歴史研究を行うことにある。ドイツ人学者コゼレック (Reinhart Koselleck) がその代表的人物である。コゼレックは一九七八年秋に来日し、東京で二つの講演を行った。講演記録のうち、一つは翌年に『思想』に掲載され、もう一つは二〇一五年になってようやく同誌に掲載された。このことは日本における概念史やその代表的研究者コゼレックの注目度の低さを物語っている。私の専門はもと社会史であったが、コゼレックの著作を通して、テクニストの言語と構造を重視する「概念史」とテクニストの背景を重視する「社会史」が互いに密接な関係を有することに気づき、概念史に関心を持った。ところで、最近はじめて知ったことであるが、日本法制史の大家三浦周行は早くも一九〇四年に「専門学に於ける概念の必要」と題した短文において概念の重要性を唱えた<sup>四</sup>。

コゼレックの弟子に当たるシュタインメッツ (Wilibald Steinmetz) は、二〇世紀に形成された歴史的基礎概念に二つの特徴があると指摘した。一つ目は「再帰性」(reflexivity)である。

普遍的な真理は存在しないため、あらゆる概念について再吟味する必要があるという態度である。二つ目は英語化 (Anglicization) である。英語はわれわれが他の言語環境で生まれたさまざまな概念を理解するためのフィルターになっている。思えば、いわゆる「国際化」とは実は英語化である。非英語圏の人びとにとつて、英語は他者を理解するための手段であり、また他者に自己を理解してもらうための装置でもある。しかし、その一方で、英語は他者への理解を妨げる可能性をも孕む。なぜなら、他の言語環境に生まれた概念は英語化されることで、その本来の豊穡さを失いかねないからである。したがって、真の「国際化」は英語化ではなく、多言語の間を歩き来する「言語横断の実践」(translingual practice) であるべきだろう。

空間的な意味での「際」よりも、時間的な意味としての「際」はより重要な意味をもつ。時間とは抽象的概念であるが、場所の変化や人間の行いを通じて具現化される。学問に限って言えば、時間的意味としての「際」は「学際的な研究」という行為によって表されている。近代的学問体系が形成されてから、学問分野によって制限されることを良しとしない研究者は、しばしば学科横断的、すなわち学際的研究を試み、新しい学問を生み出してきた。

二〇〇一年、私は日文研の劉建輝先生が主催した満州研究班への参加をきっかけに、「学際的」な研究を意識するようになった。そして、二〇〇六年に劉先生と一緒に概念史研究班を立ち上げた。私は日本の大学の職を辞して母校南京大学に戻った後も、概念史研究を続けている。現在、南京大学学衡研究院を拠点に、仲間たちと共に二〇世紀の東アジアに影響を与えた一〇〇のキー概念についてこつこつと研究を進めている。今回の日文研訪問の主な課題は、近代東アジアの「人種」・「民族」概念に関する比較研究である。そのかたわら、長年放置していた大本教の研究も、何らかの形で総括しようと考えた。

ところが、二月半ば頃、偶然ながら、一九二〇年五月二二日の『萬朝報』に掲載された「支那の学生運動に参加した注意人物」という記事が目にとまった。それによると、東京地方裁判所検事局は過激思想を宣伝するビラを配布したとして、東京帝国大学の学生である早坂二郎を逮捕した。この学生は「吉野博士」こと吉野作造の紹介状を持って上海にわたり、滞在先で排日学生運動に参加した。当時山東問題で日中両国の政府や輿論が真っ向から対立するなかで、日本の学生がなぜ中国人学生による排日運動に参加したのか。そして、吉野作造の紹介状は誰宛のものだったか。彼はなぜそれを書いたのか。これらの謎を解くため、私は吉野の著作をひも解き、早坂が所属する新人会関係の資料も調べることにした。その中で、新しい「事実」が次々と浮かび上がってきた。ここで詳細を述べる余裕はないが、結論から言うと、一九一九年五月四日に北京で「五四運動」が勃発した後、吉野作造は中国の学生に理解を示した。彼は、ロシアからの過激思想が広がるのを防ぐため、日本の学生は中国の学生に倣って官僚・財閥を打倒し、真の「民主制」を樹立すべきだと考えた。その第一歩として、彼は密かに北京に渡って、かつての教え子である北京大学教授李大釗らと面会し、日中学生同士の「提携」の道を模索したのである。この『萬朝報』の記事との「際」会をきっかけに、私は大正デモクラシーの「行方」に強い関心を持つようになり、「デモクラシーの黄昏」と題した論文を書き上げた。これをベースに一冊の著書にまとめることができると日々精進している。

二〇世紀末、長い問学問を支えてきた「印刷文化」の衰退により、人文社会科学は厳しい境地に立たされた。イギリス人社会学者ホスキンス (Andrew Hoskins) の言葉を借りれば、「我々は「接統的な転回」(connective turn)に遭遇している。人びとは外出しなくても指で鍵盤を叩くだけで資料や情報を簡単に入手できる。プラトンはかつて、文字の発明は知識の外部化を

意味し、人々の心に「忘却」という種を蒔いたと言った。IT革命が進むにつれ、知識の外部化は一層加速し、認識の均質化も進んでいる。そこで「生」の実体験を通じて研究を行うことはより大きな意味を持つ。その「際」、われわれは何をしなければならないだろうか。

注

- 一 陳力衛『近代知の翻訳と伝播——漢語を媒介に』、三省堂、二〇一九年、第八九頁。
- 二 SUN Jiang, “Transcultural Turn of Conceptual History Research,” *Cultura: International Journal of Philosophy of Culture and Axiology*, 15(2) 2018, pp. 1–11.
- 三 ラインハルト・コゼレック「学際研究と歴史学」、『思想』一九七九年第三号。同「一九世紀…ひとつの移行期」、『思想』二〇一五年第一〇号。
- 四 三浦周行「専門学に於ける概念の必要」、『國學院雑誌』第一〇卷第三号、一九〇四年、第一三一—三四頁。
- 五 Willibald Steinmetz, “Some Thoughts on a History of Twentieth-Century German Basic Concepts,” *Contributions to the History of Concepts* 7, No. 2, 2012, pp. 99–100.
- 六 Lydia H. Liu, *Translingual Practice: Literature, National Culture, and Translated Modernity—China, 1900–1937*, Stanford: Stanford University Press, 1995.
- 七 Andrew Hoskins, “Media, Memory, Metaphor: Remembering and the Connective Turn,” *Parallax*, Vol. 17, No. 4, Routledge, 2011, pp. 19–31.  
(南京大学政府管理学院・歴史学院教授／国際日本文化研究センター外国人研究員)

## センター通信

## 図書館が日文研と世界をつなぐ

## — OCLC 他による海外連携と図書館サービス

江上敏哲

国際日本文化研究センターは、資料課による海外向け図書館サービスの一環として、二〇一八年より、「OCLC WorldCat」の目録情報公開と「OCLC WorldShare ILL」への参加による海外 ILL の本格的な受付を開始した。海外からの日文研所蔵資料の可視化およびアクセスを強化すること、海外からの ILL 受付サービスをより便利にかつより省力化すること、そしてこれら海外への研究協力機能の強化により日文研のプレゼンスを上げること、などをねらいとしている。

本稿では、本事業の概要と意義、一年経過した時点での実際の効果と課題を報告する。

日文研は「研究活動」と「研究協力活動」の二つを活動の大きな柱とするが、図書館の利用と資料提供はその「研究協力活動」の最前線に位置すると言って良い。大学共同利用機関に付設された図書館として、学生・研究者の受入、外部者来館利用への対応に加え、図書館間の資料提供、すなわち ILL (Inter Library Loan) 現物貸借・文献複写もまた重要なサービスとして位置づけている。二〇一八年度一年間の ILL 受付実績は、現物貸借六四五件、文献複写一六一七件にのぼる。そもそも図書館というものの自体、図書館同士の「横のつながり」が不可欠である。日文研図書館は年間で約一万冊程度の資料をあらたに蔵書に加えており、日本の学術

図書館としては多い方の部類に入るものの、一方で国内で出版される書籍は年間約八万点と言われる。一図書館でこの世のすべての図書を買集めることが不可能である以上、ILL等の図書館間協力がなければ、利用者が求める資料・情報を満足に提供することはできない。特に海外の大学・図書館のように日本語資料が潤沢に所蔵されているわけでは無い機関にとって、この問題は切実である。海外の大学で日本語資料の所蔵が最多と言われるハーバード・イェンチン図書館（約三二万冊）は別格で、多くても数万点、あるいは数千点や数百点レベルの蔵書でなんとかまかなっているという機関が大多数である。このような海外の大学・図書館やその研究者・利用者にとっては、北米内・欧州内等での図書館間貸出だけでなく、日本からの資料提供によるサポートがその研究活動を左右することになる。

そこで期待されるのがOCLCのような世界規模の図書館サービス機関の存在である。アメリカ・オハイオ州に本拠地を置くこの非営利団体は、一七二カ国・七万館以上の図書館が参加し、その総合目録であるWorldCatには四億タイトル分の書誌レコードが登録されている。日本で同様のサービスをとおこなうNII（国立情報学研究所）の参加大学が一一三〇〇、

書誌が一二〇〇万タイトルであることと比べると、その規模の大きさがわかるだろう。このWorldCatをベースとしたILLシステム・WorldShare ILLには五六カ国から一万館以上の図書館が参加し、一年間で七〇〇万件の資料が図書館間を行き交っている。国や分野をのりこえてユーザに資料・情報を届けるインフラとして充分に期待できる存在である。

ただし残念なことに、OCLC WorldCatやWorldShare ILLへの日本からの参加はごく少数に留まっている。主な機関に国立国会図書館や早稲田大学等があるが、国立大学や国立の研究所の参加はこれまでなかった。多くの国内の大学はNIIによる総合目録やILLシステムに参加し、国内サービスの充実に特化しているのが現状である。大学図書館が国内でやりとりするILLは五〇万件近くにおよぶが、ZACSYS-ILLの枠組みを越えて海外に門戸を開いているところは少ない。このため海外の研究者が日本の図書館から資料提供を受けようとする場合には、(一) 国立国会図書館に頼むか、(二) 早稲田大学図書館に頼むか、あるいは(三) 日本の大学の一部が北米大学とのILLをおこなうために構築したプログラム「GIF」を利用する、といった選択肢しかない。そうでなければ個別に交渉するかであろう。しかし海外からのILL

Lを「受け付けないわけではない」という大学図書館であっても、ウェブサイトで大々的に広報するまでには至らない、そこまでの度量や余裕はないということも多い。海外側にしてみれば、たまたまその存在を知っているか、私的なコネに頼る他はなく、さながら祇園の小料理屋かのようなようではある。あまつさえ(三)のGIFが二〇一八年三月をもって終了することが決定され、日本の海外ILL受付はきわめて厳しいものとなりつつあった。

日文研図書館においても海外ILL受付はこれまでごく少数の例外的対応しかできておらず、ハードルの高さが長年の課題であった。その解決のため、毎年海外でおこなわれる日本研究司書の国際会議であるEARS(ヨーロッパ日本資料専門家会議)やNCC(北米日本研究資料調整協議会)に参加し、海外の日本研究者やライブラリアンへのニーズ調査や相談・ディスカッションを重ねてきた。その結果、日文研の「海外への研究協力」という機能を強化するためには、図書館サービスとしての海外ILL受付の強化、その前提としての総合目録による情報発信、そしてそのインフラとしてOCLCを選択することが最適であろう、と判断するに至った。できることなNACSIS-CATと、国内大手の総合目

録システムがOCLCと連絡してくれば最良ではあるが、どうやらその望みは薄そうであるとわかり、独自の参加を選ぶことになった。

ILL受付を実現するためには、所蔵する大量の目録情報を総合目録データベースに登録することと、料金の授受をスムーズな仕組みとすることが不可欠である。日本におけるOCLCの代理店は紀伊國屋書店であり、二〇一六年頃からその担当者に相談を持ちかけ、これらについての検討を重ねてきた。その過程で、OCLCの欧州アジア太平洋地域担当部署から提案を受け、大量の目録情報の一括登録が実現するに至った。併行して、ILLシステムの導入も準備が進められた。海外ILL受付における最大の難所が「料金を海外からどのように受け取るか」であり、国内の多くの大学図書館がこれによってサービスを阻まれる。OCLC WorldShare ILLにはIFMという料金授受を効率化するシステムがあり、かつ実際の請求・支払処理は国内代理店の紀伊國屋書店とこのなうことが可能である。これらの利点と財務課の協力により、この難所もクリアすることができた。

結果、まず二〇一八年一月にWorldCat上への目録情報の登録が完了した。すでにWorldCat上に同一資料の書誌があ

る場合は所蔵情報だけを登録（約一三万件）するが、WorldCatに無いものを日文研が所蔵していれば新規に書誌情報が登録され、その数は約一七万件に及んだ。また本事業では、すべての書誌情報にあらたに日本語ヨミのローマ字形が一括付与されている。このローマ字データはその後、日文研のローカルシステムにも登録された。

ついで二〇一八年四月から、WorldShare ILLを介した海外ILLの本格的な受付が開始された。当初、大量の依頼件数による業務負荷や国をまたいだやりとりによるトラブルが心配されましたが、結果的には日常業務の範囲内でこなすことができるレベルに落ち着いていると言っており、二〇一八年度一年間の受付件数は二三六件（複写一六一件、貸出四七件、全頁複写二七件、寄贈一件）で、北米が最多ではあるが、アジア、ヨーロッパ等の各国から幅広く依頼がある。想定外だったのは中国語や韓国語等の日本語以外の資料にも依頼があったことで、海外ユーザのニーズの実際を知ることができた。一方、受け付けられなかった謝絶件数は二八九件と、受付件数よりも多い。その多くは、所蔵しない資料へのリクエスト（一〇五件）、自国内・北米内にある資料へのリクエ

スト（七二件）等、先方の確認不足に由来するものである。

ILL受付が順調なだけでなく、蔵書への日々の問い合わせや閲覧依頼が増えたこと、海外とのやりとりにおけるコストやトラブルに関する知見が得られること、日文研の存在と意義を広報できたこと等、総じてメリットが多かったと言える。一方でこのされた課題として、毎年のOCLCへのILL参加料・目録登録料をどのようにまかなっていくか、ILL料金に反映させるべきなのか、という問題がある。またWorldShare ILLやIFMに対応していない大学・図書館も依然多く、受付方法は引き続き検討しなければならない。

そして最後に、日文研図書館五六万冊の蔵書だけで海外からの多種多様なリクエストすべてに対応できるわけではない。より多くの国内機関・大学図書館による同様の取り組みがなければ、本来の意味で有効な海外への資料提供体制は実現できないのである。本事業において得られた知見を、本稿のようなかたちで発信し、共有することによって、他機関の同様の取り組みを少しでも促すきっかけとなることができれば、幸いである。

（国際日本文化研究センター資料課資料利用係）

Modern Japan in Comparative Imagination  
An Interdisciplinary Conference at Durham University, 9-10 May, 2019 参加報告

稲賀 繁美

小規模だが重要な国際的研究会が、表題のもとに開催された。若手から中堅の日本研究者の発表が中心だったが、別格の招待者としては Carol Gluck、Harry Harootian のほか、本センターの坪井秀人氏が含まれる。会場はイングランド北部の古い大学町。新緑に覆われたウィアー川は、町の中央で大きく湾曲する。そのさなか、浸食から残されて佇立する丘陵のうえに、ダーラム大聖堂の巨大な伽藍が聳える。その背後に控える古城の二階奥の Senate Room が会議会場に割り当てられた。日本の歴史、文学、美術の研究者を中心とした領域横断の集いであり、国籍や文化間の境界を跨ぐ比較の方法論を含めた議論が中心となる。

第一の話題は東西比較における日本近代の位置。Raja Adai は比較教育学の立場から日本の美術教育における書道の位置



ダーラム城。学会会場（撮影：稲賀 2019年5月9日）

づけをエジプトの能書の場合と比較。「書ハ美術ナリヤ」の論争をイスラーム圏の経験に投射した。非西欧は対峙する西欧近代と自らとを比較したが、そうした東西比較そのものの文化圏を跨いだ相互比較というメタ水準の提唱。つづく Aleksandra Kobijiski は京都における新島襄の同志社創設を、背後にある北米長老会宣教団のベイルートでの活動と比較する。日本側の盲点を突く提案であり、政治権力の中核から放擲された空白地帯が、欧化する都市開発のなかで教育の場に転用された例の比較としても興味深い。そこにはキリスト教宣教という世界を覆う mission の拡散が反映する。

Konrad Lawson は荻生徂徠をマキャヴェッリと比較する丸山眞男の比較意識そのものの西欧的拘束性を問題視し、他者の文化を自らの範疇で分析しようとする傾向からの脱却を模索する。私見では価値非拘束の比較軸などもより立てようがないからこそ、例えば西欧起源の制度や技術が非西欧各地に伝播していかなる変性を被ったかの比較といった地道な方法のほうが、徒に普遍性や客観性を求める比較文化史よりも安全弁が効いている。司会兼討論者の Adam Talib は、比較史は記述に制約が多いため密度の濃い記述が困難になる難点を指摘する一方、植民地都市として近代京都の媒介性を分析

する可能性などを示唆した。私見では、皆川淇園の弘道館の隣接地に同志社が出来、神主で南画家の富岡鉄斎も近隣に卜し、大学が近代シナ学のメッカともなった、という近代都市・京都の比較地政学も、ここから可能となるだろう。

これを受け、第二の話題ではそもそも比較は可能なのか、という問題提起。Sungeun Cho は敗戦後の日本における民主主義概念を、藤田省三と松下圭一との対比において検討。東大法学部提出の博士論文に基づく分析だが、むしろ「市民」や「大衆」といった戦後日本の標語のアカデミズムにおける観念性、抽象性が浮き彫りになる。当方は佐藤誠三郎などの動向を少しは知る年配者として、発表後の雑談で、論者に現場の実態を裏話としてお伝えした。越智敏夫も戦後民主主義を日米関係のなかで検討したが、現状への嫌悪を隠さぬ即興の政治談議。平成の代替わりに関する識者のコメントを評し、金井美恵子の批判を評価する一方、高橋陸郎の天皇制擁護姿勢には辛辣だったが、陸郎がそうする裏の事情にまでは踏み込まず。「悔恨共同体」（丸山眞男）の懊悩は「日本語」の外部に伝達可能なのだろうか？

Hansun Hsiung は吉田松陰に始まる蘭語 *Vrijheid* 理解を文献学的見識も生かしつつ、縦横に裁断。フランス革命の是非

とナポレオンの英雄伝とが癒着したなかで、オランダ「独立」とも絡まる「自由」という新概念の翻訳受容の一齣。そこには republic や empire の訳語と儒教倫理との是非・相性も錯綜し、訳語選択の模索から逆に、当時の国際政治情勢や政治思想における東西の交錯が、生々しい姿で浮かび上がる。

討論者の William Schaefer を交えた討論では、越智からの発言で、平成の終焉あるいは「生前葬」から回顧して、昭和の終焉が美空ひばりや手塚治虫の死と共に記憶されたことの意味が問われ、また青年期の皇太子を身辺に持たない孤独な天皇の治世に戦争が多発した、とする中井久夫の観察も話題となった。松下の「自由」がロック流の能力概念なら、藤田は「外」からの解放に力点をおく。私見だが、舶来概念を操る政治学上の国際比較には、翻訳問題がなお開拓課題として残る。

午後の最初の基調講演では坪井秀人が山田耕筈の滞独期の作曲を扱い、ジュディット・ゴーチエ經由他で独訳された百人一首の和歌の解釈に踏み込んだ。カール・フロレンス訳で脱落した日本語の語感が、日本語には無知なはずのハンス・

ベートゲの *Nachrichtung* で回復されている箇所など、興味深い指摘を伴う見事な議論である。コメントの Carol Gluck は北米における日本研究の半世紀を回顧し、八〇年代にジョン・ホールが推奨した、「日本は例外」の類の比較史がことごとく無効になっている現状を確認した。他者の誤謬を指摘するためではなく、自己の誤謬を検出するための比較は、自己の文化を他者の範疇で検討することとも裏腹だろう。二つの対象を等距離から比較するための観察地点となるべき第三項も、実際には政治的な覇権に依存しがちであり、それが昂ずると観察者の優越感や罪障感へと逆走する。だが他者から無縁な真正なる「土着の語り」などもとより存在しない。

マルク・ブロックの比較史の提唱からカルロ・ギンズブルクの非対称比較、マルセル・デティエンヌの『比較できないものを比較する』など多くの理論的考察を動員したグラックは、結論として「設問志向の想像力」「別様に思考する」方法としての比較を提唱し、山田耕筈の場合にも、欧州經由の日本再発見という回路とともに、それに不可分な破綻あるいは挫折の内在にも言及した。横光利一の『旅愁』や同船で欧行した高浜虚子の事例も想起される。坪井との議論では、作曲家の民族性を巡って、日本や北米での滞在経験を持つプロ

コフィエフの事例や、移住した北米に没したバルトックの反ハプスブルクのバルカン性も話題となった。

第二日目には第三の論点として、物質文化、視覚文化を焦点に、比較の視点を検討した。Ming Tiampo が現代美術の展示を話題に、どのように比較が展示されてきたのかを、豊富な例を挙げつつ論じた。非欧州の美術は二一世紀初頭までは欧州中心史観の枠組みに組み込まれる場合が多かった。だが一九八六年のニューヨーク現代美術館での「二〇世紀の未開主義」展への悪評をひとつの転換点として、欧米の主要都市における展示でも欧州優位の姿勢は急速に後退してゆく。とはいえモノと浮世絵を並置するカナダの展示では、近年でもなお主客の位置格差は動かない。だがこれとは対照的に、日本の国立西洋美術館では欧州のまなざしに映った北斎を展示するとうい転倒が二〇一八年に企てられる。そうしたなか論者は、北川フラムが中心となり針生一郎が協力した一九八八年の先駆的な「アパルトヘイト・ノー」に注目し、亡命と連帯との弁証法に、比較展示の可能性を探る問いを投げかけた。続く稲賀は、西欧起源の技法の非西欧世界での受容にともなう変質、西欧側の主張する普遍性が国際関係のなかで被る

脱構築、さらに宗教上の基本概念が翻訳を通してどこまで等価性や共約可能性を維持でき、それにはいかなる政治的条件が求められるのか、それぞれ、透視図法、森鷗外の国際赤十字会議における発言、さらにキリスト教のケノーシスと禅の「無」や仏教の「空」との交渉を具体例として検討した。とはいえAaron Mooreを交えた討論では、比較を許す枠組みの本質的な恣意性に関わる認識は、なお比較史学の専門家に共有されているとはいいがたい現状も露呈した。「等価性」の代わりに「類似性」を問題にしては？という提案もなされたが、類似の基準が価値判断から自由でないことは渡邊慧の「見にくいアヒルの子」の定理が見事に立証するところ、というのが稲賀の素朴な持論である。

午後にはもうひとつの基調講演として本年九〇歳の長老Harry Harootianが「比較の想像力」と題し、セミナーでの授業風景を彷彿とさせる談話。空間性より時間性を優先させる近年の持論を基礎に、ジャック・ランシエールの『プロレタリアの夜』とペーター・ヴァイスらの「抵抗の美学」および成田龍一・（故）道場親信らが近年取りあげるサークル運動を連関させて論じようとする。論者が「地学的想像力」geological imaginationを強調するので、酒井直樹の「地理学

的想像力」geographical imaginationとの対比を質してみたが、日常の労働時間での重ね描きが透視される地層の分断や断層／褶曲に権力への抵抗の兆候を捉える意識は、酒井の国民国家批判の枠組みとは大きく乖離している。討論後の雑談で、ハリーとは戦後同時代の生き証人である竹村民郎の「戦場の歴史」とイタリヤで精神病院廃止に尽力したフランコ・ヴァザーリアの事例の比較などを論じて興じた。グラックもハルトトゥニアンと「多元的時間性」の概念について遣り取りしたが、議論は平行線。

最後の円卓討論では、歴史家と文藝・美術研究者との議論がなぜか噛み合わず、欲求不満が高じたので、発言した。ハリーとはかつてシカゴで翻訳について公開討論をした経験がある。その延長だが、谷崎の『細雪』は北米では *Mothika Sisters* と改題された。その背後にはトーマス・マンの長編に印象を重ねようとする出版戦略が隠されていた。この小説の終末の春子の「下痢」の記述は、日本語の自在な時制感覚と話者の（自由間接話法による）流動性が英語流に整序された結果、英訳で読むと、いかにも唐突との印象を免れない。だがアンガス・ウィルソンはその唐突さにこそ、小説の将来へ

の可能性を発見した—と思い込んだ。これは片岡真伊の博士論文の一章からの知見だが、こうした翻訳上の「等価性」の逸脱から、「比較」の実態も露わになる。大上段に振りかぶった比較方法論は見落としがちだが、ここに露呈するような落差や誤解の蓄積こそが、グラックの提唱した「比較」の教訓であり、ハルトトゥニアンが問題にした、「時間の搾取」を隠蔽する文化交流史上の詐術だったのではなからうか。

引き続き Aaron Moore が別会場で「戦時下の子供たち」の国際比較について講演。質疑応答で些か発言。まずここで取り上げられた対象と同一の世代が『細雪』訳者のサイデンステッカーやドナルド・キーンと重なること。またこの世代の日本人が受けた自由作文教育が彼らの戦争体験証言の文体に影響している可能性のあること。日本人の証言に顕著な時間軸にそった羅列にも、年表を重視し因果律に無頓着な日本の教育方針が反映していること。最後に同世代の女性たちの「生活綴り方」が、戦後に官学の史学から解放されたルポルターージュへの可能性を開く一端をなし、この現象はナタリア・ギンズブルグの『ある家族の会話』のかたわらで、同時代の他のアジアとの比較に値すること。

まだ未成熟な議論が残り、複数、専門分野を跨ぐ意見交換の

必要も痛感された。だがそれゆえここには、なお未開拓な可能性も秘められている。以上、きわめて簡略な報告に止まる。会議直後に報告執筆の暇がなく、割愛した論点も多い。最後に、会議を組織しお招き頂いたダーラム大学の Adam Bronson、印南美沙子両氏に心より謝意を述べたい。

二〇一九年六月二八日記

(国際日本文化研究センター教授)

## 共同研究

(二〇一八年四月一日～二〇一九年三月三十一日)

### 〈重点共同研究〉

投企する古典性視覚／大衆／現代

(研究代表者 荒木浩)

〔共同研究者名〕

稲賀繁美、石上阿希、呉座勇一、伊藤慎吾、ガリア・トドロヴァ・ペドコヴァ・ガブロフスカ、ゴウランガ・チャラン・プラダーン、前川志織、ローレンス・マルソー、ケラー・キンブロー、李銘敬、飯倉洋一、上野友愛、岡田圭介、河東仁、恋田知子、河野貴美子、河野至恩、合山林太郎、齋藤真麻理、竹村信治、中野貴文、中前正志、野網摩利子、三戸信恵、箕浦尚美、山本陽子、渡部泰明、渡辺麻里子、深谷大、屋良健一郎、平野多恵、マラル・アンダソヴァ、徳永誓子、土田耕督、

エドアルド・ジェルリーニ、松平莉奈、今井秀和

〔海外共同研究員名〕

楊曉捷、山藤夏郎、李愛淑、金容儀

〔研究発表〕

〈第一〇回研究会〉

二〇一八年四月二一日

マラル・アンダソヴァ『『古事記』研究におけるM・パフチンの〈対話論〉の可能性について』

屋良健一郎『近世琉球における和歌の受容と展開』

二〇一八年四月二二日

岡田圭介「出版社を『編集』すること―『文学通信』の立ち上げと、学術メディアを取りまく状況」

〈第一一回研究会〉

二〇一八年七月二八日

河東仁「震災復興と伝統芸能」宮城県南三陸町を中心に  
「」

板坂則子「艶書往来『文のはやし』攷―最も読まれた春  
本に見る実用性と娯楽性」

二〇一八年七月二九日

ローレンス・マルソー『伊曾保物語』―翻案、画像、古  
典性―

河野貴美子「近代日中の図書館形成及び図書分類から考  
える古典研究の問題と可能性」

〈第二二回研究会〉

二〇一八年九月二二日

ガリア・トドロヴァ・ペドコヴァ・ガブロフスカ「『投企』  
する古典性―男性中心日本伝統芸能の「女性」パー  
ジョンを巡って」

ヴィーブケ・デーネーケ、河野貴美子「日本文学史」の  
今後百年―『日本「文」学史』から見通す」

二〇一八年九月二三日

深谷大「説教源氏節をめぐって」

中野貴文「古典との出会い方」

〈第一三回研究会〉

二〇一八年十一月一七日

和田琢磨（ゲストスピーカー）『太平記』と武家―南北  
朝・室町時代を中心に―

谷口雄太（ゲストスピーカー）「『太平記史観』をとらえ  
る―足利氏研究の事例から―」

井上泰至（ゲストスピーカー）『太平記』の近世的派生  
／転生―後醍醐・楠像を軸に―

伊藤慎吾「妖怪資料としての『太平記』受容」

二〇一八年十一月一八日

亀田俊和（ゲストスピーカー）『太平記』に見る中国故  
事の引用」

コメント・小秋元段（ゲストスピーカー）

〈第一四回研究会〉

二〇一八年十二月二二日

棚橋正博「江戸文学・文化の評価―三田村鳶魚を中心  
に―」

佐々木亨「好事家の冠したジャンル名称―明治期草双紙  
を巡って―」

〈第一五回研究会〉

二〇一九年二月一六日

箕浦尚美「お伽草子と古典の投企」

齋藤真麻理「狩野派の戯画―その生成と展開―」

二〇一九年二月一七日

前川志織「岸田劉生「麗子像」シリーズにみる古典性・

大衆・現代・近代日本美術をめぐるメディアと「複製」を手がかりに」

三戸信恵「風景を捉える川合玉堂の「眼差し」―大衆性

と同時代性と―」

## 「運動」としての大衆文化

〔研究代表者 大塚英志〕

〔共同研究者名〕

アルバロ・ダビド・エルナンデス・エルナンデス、山本忠宏、前川志織、金日林、板倉史明、内田力、菊地暁、北田暁大、近藤和都、嵯峨景子、佐野明子、杉本仁、鈴木麻記、鈴木洋仁、團康晃、鶴見太郎、石田美紀、萩原由加里、ビョーン・オーレ・カム、藤岡洋、牧野守、松井広志、室井康成、雑賀忠宏、竹村民郎、川松あかり、藤嶋陽子、執行治平、花田史彦、香川雅信、

上原功一、谷島貫太、滝浪佑紀、櫻木千恵、北浦寛之、川口典成

〔海外共同研究員名〕

浅野龍哉、蔡錦佳、斉夢菲、秦剛、マーク・スタイン  
バーグ

〔研究発表〕

〈第四回研究会〉

二〇一八年七月二八日

北浦寛之「日活の戦争映画―『土と兵隊』(一九三九)を中心に」

アルバロ・ダビド・エルナンデス・エルナンデス「メキシコ映画『Rio Escondido』(一九四七)：モニタージュとプロパガンダ」

鈴木麻記「アジア太平洋戦争中における、台湾および満州における漫画家養成の動き」

二〇一八年七月二九日

藤岡洋「リニアなレイヤーと「レイヤーの統辞法」

滝浪佑紀「一九三〇年代後半の岩崎昶」

萩原由加里「政岡憲三の『漫画映画入門』と『政岡憲三 動画講義録』について」

花田史彦「大衆文化」と「教育」の交点―評論家・佐藤

忠男の仕事にみる」

〈第五回研究会〉

二〇一八年一〇月一三日

藤嶋陽子「日本におけるファッションショーの変遷―

家庭での洋裁から文化産業への移行」

山本忠宏「写真小説における形式と変遷」

石田美紀「占領期NHKラジオにおける民主化運動とし

ての連続放送劇と声優業の萌芽」

二〇一八年一〇月一四日

川口典成「日本演劇と戦争と公共性」

近藤和都「スクリーンと規格―戦時下における映画の

「国民化」をめぐる」

板倉史明「特撮映画ファンの共同体と創作活動」

執行治平「ヘンリー・ジェンキンスの軌跡から見る

「ファン研究」の射程」

〈第六回研究会〉

二〇一九年二月二三日

嵯峨景子「戦時下の少女雑誌―『少女倶楽部』『少女の友』

『少女画報』を中心に」

雑賀忠宏「悪書追放運動」再訪…マンガの規範性をめぐる大衆文化運動として」

佐野明子「戦中・戦後におけるディズニーの受容と展

開…渡辺泰コレクションを手がかりに」

前川志織「戦間期日本の新聞広告にみる洋菓子の意味の

変遷と「大衆」としての子ども像」

二〇一九年二月二四日

アルバロ・ダビド・エルナンデス・エルナンデス「カナダ

シンポジウムについての報告」

金日林「オタク文化と公共性」

菊地暁「私の民俗学運動史研究」

姜文姫「北海道における炭鉱の文化運動―太平洋炭鉱の

主婦会と『母のうぶごえ』を中心に」

内田力「運動としての「歴史修正主義」…『国史大辞典』

元号方針変更事件と網野善彦を中心に」

松井広志「メールゲーム／ネットゲームのコミュニケーション

ションと文化―ゲームの地域史、多元的なゲーム研究

に向けて―」

## 音と聴覚の文化史

(研究代表者 細川周平)

〔共同研究者名〕

光平 有希、中原ゆかり、青嶋純、秋吉康晴、宇都宮聖

子、岡崎峻、奥中康人、柿沼敏江、葛西周、春日聡、

金子智太郎、久保田晃弘、齋藤桂、城一裕、谷口文和、

土田牧子、辻本香子、中川克志、長崎励朗、昼間賢、

福田裕大、福田貴成、細馬宏通、横井一江、吉田寛、

輪島裕介、渡辺裕、長門洋平、越智朝芳、福永健一

〔海外共同研究員名〕

キャロライン・S・ステイブンス、山内文登

〔研究発表〕

〈第六回研究会〉

(所外開催 浜松市楽器博物館、静岡文化芸術大学、サゴ

ロイヤルホテル)

二〇一八年五月四日

浜松市楽器博物館見学

浜松まつり 市内随所にてラッパ隊見学

二〇一八年五月五日

浜松まつり 市内随所にてラッパ隊見学

中田島会場にて浜松まつり凧あげ見学

奥中康人「浜松まつり・楽器産業に関する講義」

〈第七回研究会〉

二〇一八年五月二六日

青嶋純「丹後のサウンドプロジェクトを辿る…《日向

ぼっこの空間》から「古代の丘の遊び」ART CAMP

TANGOまで」

岡崎峻「音響芸術からみる水中の音世界」

谷口文和「初期パソコン受容に見る『音楽を作る』とい

うこと」

二〇一八年五月二七日

細馬宏通「有線放送電話の放送形態と放送のアーカイヴ

ズ化・滋賀県愛荘町の場合」

〈第八回研究会〉

二〇一八年九月二二日

昼間賢「ベトナムの一弦琴〈ダンバウ〉の音響 〈一つの

音〉とは何か」

中川克志「一九六〇年代から九〇年代における雑誌『美

術手帖』における〈音／音楽〉の諸相」

書評会「デヴィッド・グッドマン著『ラジオが夢見た市民

社会』(岩波書店)の訳者長崎励朗(桃山学院大学・社会学部)を囲んで」

コメントーター…光平有希、福永健一、阿部万里江、細川周平

二〇一八年九月二三日

自由討議

〈第九回研究会〉

二〇一八年二月八日

辻本香子「東アジアの市街地における芸能／スポーツとしての龍舞」

奥中康人「群馬県の消防ラップ手はどんなメロディを吹いたのか？」

書評会「Marie Abe, Resonances of Chindon-ya (2018)」

コメントーター…阿部万里江、細川周平

二〇一八年二月九日

輪島裕介「日本のディスコ史における音と身体」

吉田寛「デジタルゲームにおける認識的音 (Epistemic

Sounds in Digital Games)」

〈第一〇回研究会〉

二〇一九年三月九日

横井一江「音楽と音の狭間で〜オフサイトとはどのような場所だったのか」

久保田晃弘「ライブコーディングと即興」

土田牧子「浅草劇場街で鳴り響いた音」

二〇一九年三月一〇日

阿部万里江「空耳と聴覚のアポフェニア―エチオピアと

日本間の共鳴する親近性」

長崎 励朗「声の教育都市・大大阪」

春日聡「細男はどこからきたのか―おん祭り・アジア南

部・九州北部における比較芸能研究」

応永・永享期文化論―「北山文化」「東山文化」という大衆的歴史観のはなまじり―

(研究代表者 大橋直義、呉座勇一)

〔共同研究者名〕

伊藤慎吾、高橋悠介、橋本正俊、小助川元太、小山順

子、貫井裕恵、山田徹、芳澤元、川本慎自

〔海外共同研究員名〕

亀田俊和

〔研究発表〕

〈第一回研究会〉

二〇一八年九月九日

山田徹「室町時代における大名家の追善仏事と禪宗寺院」

高橋悠介「応永・永享期の太子伝承」

天野文雄（ゲストスピーカー）「室町幕府の松囃子をめぐ

る二、三の問題―その形成と実態―」

報告書編集に関する会議

〈第二回研究会〉

（所外開催）同志社大学今出川キャンパス良心館）

二〇一八年二月一日

呉座勇一「応永・永享期における今川氏の歴史認識」

貫井裕恵「室町期における東寺と『東宝記』―東寺執行

家を中心―」

川口成人（ゲストスピーカー）「室町期における大名一門・

大名被官の文化的活動」

二〇一八年二月一日

小助川元太『搦囊鈔』の守護寺縁起」

小山順子「勅撰和歌集終焉期の女性歌人について」

竹島一希（ゲストスピーカー）「梵灯庵から宗廟へ」

〈第三回研究会〉

二〇一九年二月九日

谷口雄太（ゲストスピーカー）「幻の「六分の一殿」―山

名氏にまつわる言説の検証―」

坂本亮太（ゲストスピーカー）「南北朝・室町期における

臨済宗法灯派の地域展開―紀州地域を中心に―」

亀田俊和「台湾人学生の日本史に対する興味関心と問題

意識」

二〇一九年二月一〇日

（所外開催）和歌山県立博物館）

和歌山県立博物館 館藏品等 特別閲覧調査

二〇一九年二月一日

（所外開催）和歌山県有田郡有田川町久野原 岩倉神社）

久野原 御田 見学

解説・吉村旭輝（ゲストスピーカー）

〈第四回研究会〉

（所外開催）慶應義塾大学附属研究所斯道文庫、慶應義塾大

学 三田キャンパス）

二〇一九年三月二日

慶應義塾大学斯道文庫にて古典籍閲覧調査

解説・佐々木孝浩（ゲストスピーカー）

二〇一九年三月三日

〈公開研究会「室町文化と外縁―文芸に〈国際性〉を読む―〉

基調講演…廣木一人(ゲストスピーカー)「日明勘合貿易

と連歌師宗祇―金子金治郎説の検証を通じて―」

小川剛生(ゲストスピーカー)「頼阿句題百首の源泉―宋

末元初刊の詩集・詩話との関係を中心に―」

伊藤慎吾「東坊城秀長の文事とその後の菅原家」

芳澤元「都鄙関係・境界地域にみる室町文化」

コメンテーター…橋本雄(ゲストスピーカー)

総合司会…小山順子

### 〈国際共同研究〉

万国博覧会と人間の歴史

(研究代表者 佐野真由子)

(共同研究者名)

井上章一、稲賀繁美、瀧井一博、劉建輝、ロバート・

ヘリヤー、石川敦子、市川文彦、岩田泰、鵜飼敦子、

江原規由、神田孝治、澤田裕二、寺本敬子、中牧弘允、

芳賀徹、増山一成、武藤秀太郎、武藤夕佳里、橋爪紳

也、林洋子

### 〔海外共同研究員名〕

青木信夫、ウィーベ・カウテルト、シビル・ギルモンド、

徐蘇斌、青木リジラルデッリ美由紀

〔研究発表〕

〈第一〇回研究会〉

二〇一八年六月二日

増山一成「紀元二六〇〇年記念日本万博の連続性・非連

続性―一九三〇年代の国際博覧会日本展示をめぐる

人・モノ・社会との比較を中心に―」

鵜飼敦子「エミール・ガレと万国博覧会」

ウィーベ・カウテルト「メッセージ発信の装置としての万

博―二〇一五年ミラノ万博の分析を中心として―」

二〇一八年六月三日

君島彩子「大阪万博と仏教」

中牧弘允「博覧会と博物館―夢の後始末をめぐる―」

清水章(ゲストスピーカー)「万国博覧会におけるパビリ

オンのデイスブレイ―ニューヨーク世界博(一九六四

―一六五)・モントリオール万博(一九六七)・大阪万博

(一九七〇)を中心に―」

聞き手…石川敦子

〈第一二回研究会〉

二〇一八年九月八日

石川敦子「装飾業から大阪万博を経てディスプレイ業へ」  
井上章一「黒川紀章と万国博覧会一九七〇―スター誕生」  
馬場伸彦（ゲストスピーカー）、飯田豊（ゲストスピーカー）  
カー「タイムカプセルのメディア論―未来遺産としての大阪万博」

二〇一八年九月九日

白山眞理（ゲストスピーカー）「山端祥玉と一九三九年  
ニューヨーク万国博覧会―写真壁画とカラー動画」  
上村敏文（ゲストスピーカー）「バチカンと万博―平和と  
進歩、人間の再発見」  
江原規由「万博における中国要素」

〈第一二回研究会〉

二〇一八年二月八日

寺本敬子「フランスと一九二八年国際博覧会条約」  
サラ・デュルト（ゲストスピーカー）「イタリアを展示する―一九四二年ローマ万博とエウルのその後」  
橋本順光（ゲストスピーカー）「博覧会であいまいしよう―  
博覧会を舞台にしたロマンス作品とマイナー・トラソ

スナシヨナリズムの可能性」

二〇一八年二月九日

有賀暢迪（ゲストスピーカー）「科学技術政策の言説としての大阪万博日本館」  
澤田裕二「国際博覧会の変遷と未来」  
佐藤恵子（ゲストスピーカー）「二〇二五年万博取材して」

〈第一三回研究会〉

二〇一九年三月九日

佐野真由子「万国博覧会という、世界を把握する方法」  
市川文彦「近代博から現代博へのシステム転換一八五一―二〇一七―捉えられた〈世界〉と審査・褒賞制」  
岩田泰「万博の歴史に博覧会国際事務局（BIE）が果たした役割」

二〇一九年三月一〇日

執筆予定原稿の概要発表と討論

差別から見た日本宗教史再考―社寺と王権に見られる聖と賤  
の論理

（研究代表者 磯前順一、吉村智博）

〔共同研究者名〕

石川肇、鈴木岩弓、鍾以江、ハサン・カマル・ハルブ、  
小田龍哉、佐藤弘夫、小倉慈司、鈴木英生、川村覚文、  
山本昭宏、青野正明、荻田真司、船田淳一、太田恭治、  
浅居明彦、佐々田悠、寺戸淳子、金沢豊、西宮秀紀、  
井上智勝、舟橋健太、鶴見晃、河井信吉、上村静、安  
部智海、竹本了悟、守中高明、関口寛、岩谷彩子、久  
保田浩、吉田一彦、林政佑、大村一真、戸城三千代、  
和田要、大林浩治、山田忍良、里見喜生

〔海外共同研究員名〕

トモエ・イレエ・ネ・M・シユタイネットワーク、ラジ・C・シユ  
タイネットワーク、ランジャナ・ムコバディヤヤー、ダニエル・  
ボツマン、酒井直樹、和氣直子、尹海東、呉佩珍、片  
岡耕平、ヒトミ・トノムラ、ガルミッシュ・フロランス、  
平野克弥

〔研究発表〕

〈第一二回研究会〉

二〇一八年五月一二日

川村覚文、船田淳一「磯前論を読む」

司会…鍾以江

コメント…金沢豊、小田龍哉

「日本宗教史セクション」

小倉慈司「古代の皮革・屠畜業従事者に注がれた視線」

佐々田悠「古代日本の穢れと罪―儀式にみる排除と「公

共性」

吉田一彦「天皇代理者への崇拜―聖徳太子信仰の歴史と

特質」

吉村智博「神道国教化政策期の神社祭祀と被差別民―近

江国における廃仏毀釈と氏子加入の過程」

司会…西宮秀紀

コメント…荻田真司

〈第一二回研究会〉

二〇一八年七月一四日

ラジ・シユタイネットワーク「聖なるもの」から宗教をよみな

おす」

司会…小田龍哉

コメント…岩谷彩子、大村一真

関口寛「日本近代の「市民社会」と部落問題」

コメント…荻田真司、佐々田悠

〈第一三回研究会〉

(所外開催 古滝屋、国道六号線、本願寺別院)

二〇一八年九月一五日

山本昭宏「長崎の原爆と被差別部落と宗教の問題について」

里見喜生（ゲストスピーカー）「古滝屋の活動について」

司会…安部智海

二〇一八年九月一六日

国道六号線フィールドワーク

ゲスト講師…里見喜生（ゲストスピーカー）

司会…金沢豊

報告…安部智海、庄司則雄（ゲストスピーカー）

〈第一四回研究会〉

二〇一八年十一月一七日

小田龍哉「東北所外開催報告」

後藤道雄（ゲストスピーカー）「中世常陸の律の仏像と聖

徳太子像をめぐる二、三の私見―律宗から初期真宗へ―

司会…吉田一彦

コメント…寺戸淳子、吉田一彦

大村一真「公共圏と聖なるもの―公共圏の境界線として

の「聖なるもの」の考察」

司会…小田龍哉

コメント…小倉慈司、舟橋健太

片岡耕平「チュウリツヒ報告」

〈第一五回研究会〉

二〇一九年二月一六日

鈴木英生、戸城三千代、金沢豊「東北所外開催総括」

司会…磯前順一

酒井直樹「天皇制と平等―平等と国體（ナシヨナリテイ）

について」

司会…菊田真司

コメント…佐々田悠、青野正明

小田龍哉「タブーと日本民俗学」

司会…関口寛

コメント…佐藤弘夫、鈴木岩弓

東西文明論―日本を東西の中間地として、懸け橋という特殊な使命を与える言説の分析

（研究代表者 デイック・ステゲウェルンス）

〔共同研究者名〕

細川周平、ジョン・ブリン、楠綾子、瀧井一博、松田

宏一郎、奈良岡聰智、野島陽子、中西寛、宇野田尚哉、

米谷匡史、山口輝臣、五百旗頭薫、福家崇洋、伏見岳

人、ベッカ・コルホネン、トルステン・ヴェーバー

〔研究発表〕

〈第四回研究会〉

二〇一八年五月一二日

五百旗頭薫「明治日本の対西洋態度」

奈良岡 聰智「第一次世界大戦期の日本におけるヨーロッパ

パ・アジアに関する言説・政党政治家を中心に」

二〇一八年五月一三日

伏見 岳人「東西文明論としての新旧大陸対峙論―後藤新

平の言説より」

ベッカ・コルホネン「Passing off the Idea of Japan as a

Bridge between the East and the West」

瀧井 一博「日本文明論の黄昏と「国のかたち」―大平・

橋本・小沢政権の政策研究会報告書を通じて」

〈第五回研究会〉

二〇一八年七月一三日

トルステン・ヴェーバー「東西文明論の一環としての王

道・霸道論」

中西寛「東西文明論の俯瞰：江戸期から昭和期まで」

二〇一八年七月一四日

山口輝臣「東西文明が調和するとき、宗教はどうなるの

か？」

成果論刊行に向けての打ち合わせ

中国近代革命の思想的起源―日本からの思想的影響を中心に

〔研究代表者 楊際開〕

〔共同研究者名〕

伊東 貴之、瀧井 一博、劉建輝、加藤雄三、鍾以江、西

田 彰一、奈良勝司、銭国紅、鐙屋 一、関智英、林文

孝、福家崇洋、岡本隆司、姜克實、植村和秀、一坂太

郎、桐原健真、濱野靖一郎、山崎岳、田頭慎一郎、稲

永祐介、高柳 信夫、中川 未来、豊田裕章、山村奨、鈴

木洋仁、トルステン・ヴェーバー、孫瑛鞠

〔海外共同研究員名〕

黄 自進、廖 欽彬

〔研究発表〕

〈第一回研究会〉

二〇一八年四月二八日

姜克實「中国のナショナリズムと革命―日本のアジア主

義を手掛かりとして」

岡本隆司「翻訳概念と外交史研究と思想史―近著からの

展望」

二〇一八年四月二十九日

濱野誠一郎「道徳の功利的形成 頼山陽の「利」の観念」

桐原健真「主権はどこにあるか…幕末日本を出発点に」

植村和秀「東亜連盟と昭和維新」

〈第二回研究会〉

二〇一八年八月五日

稲永祐介「日露戦後の国家と習俗の改良―内務官僚の中

間集団論」

鈴木洋仁「日本における「社会学」受容―外山正一にお

けるスペンサー理解を中心として」

二〇一八年八月六日

楊際開「辛亥革命の思想的起源―章炳麟を中心に」

〈第三回研究会〉

二〇一八年九月二十九日

林文孝「劉師培の教科書作成と明治日本」

田頭慎一郎「加藤弘之の世界連邦構想」

山村奨「章炳麟の『王文成公全書』批注について」

二〇一八年九月三〇日

奈良勝司「古賀侗庵の国家観と世界認識体系」

鍾以江「国体と神道」

〈第四回研究会〉

二〇一八年二月八日

劉建輝「文化史からたどる日中近代の起源」

高柳信夫「梁啓超の「革命観」について―「政治革命」

を中心に」

福家崇洋「血盟団事件再考」

二〇一八年二月九日

鎧屋一「現代中国における「革命」と「伝統」―文化大

革命と柳宗元・李白・杜甫」

中川未来「「国粹」と「アジア」…一九世紀末の義和団事

変期の中国情報流通と東邦協会・東亜同文会」

トルステン・ヴェーバー「日中関係・交流史の中の王道・

覇道論」

〈第五回研究会〉

二〇一九年三月一六日

山崎岳「近代日本の前近代対中関係史観」

鍾以江「国体と神道」

一坂太郎「幕末志士の「誕生」…久坂玄瑞」

二〇一九年三月一七日

西田彰一「寛克彦にみる国体・国教・神ながらの道」

加藤雄三『華国月刊』にみる司法ナショナリズム

関智英「冀東の構想―殷汝耕と池宗墨」

伊東貴之「伝統中国の国家・社会論ための一考察」

二〇一九年三月一八日

パネルディスカッション

基調講演 松田宏一郎（ゲストスピーカー）・・「役介（厄

介）な世界とレジテイマシ―荻生徂徠の権力観」

楊際開「近代国家を求めない中国革命」

中川未来「高橋健三の国際法思想」

鑑屋 一「アンチシステム論のグローバル史における

一九七一年の意味」

ディスカッション

「中国の誕生」における日本の役割

論文出版の打ち合わせ

明治日本の比較文明的考察―その遺産の再考―

（研究代表者 瀧井 一博）

〔共同研究者名〕

牛村圭、ジョン・グリーン、佐野真由子、加藤雄三、

石上阿希、古川綾子、楊際開、西田彰一、奈良勝司、

五百旗頭薫、岩谷十郎、植村和秀、大川真、小川原正

道、勝部真人、國分典子、塩出浩之、島田幸典、清水

唯一朗、谷川穰、永井史男、長尾龍一、中村尚史、福

岡万里子、前田勉、松田宏一郎、山田央子、岡本貴久

子、浅見雅男、上野景文、今野元、小林道彦、内藤一

成、奈良岡聰智、枡居宏枝、松沢裕作、三谷博、アミ

ン・ガティミ、大久保健晴

〔海外共同研究員名〕

ハラルド・フース、アリスティア・スウェール

〔研究発表〕

〈第一四回研究会〉

二〇一八年七月一四日

三谷博『維新史再考』（NHKブックス、二〇一七年）を

読む

評者・・島田幸典、奈良勝司、佐藤卓己（ゲストスピー

カー）、井上章一

〈国際研究集会「世界史のなかの明治／世界史にとっての明

治く

二〇一八年一月二日

主催機関長挨拶…小松和彦

シンポジウムの趣旨…瀧井一博

セッション①「世界とつながる明治日本」

青木リジラルデッリ美由紀「亜細亜東西合わせ鏡…オス

マン帝国官僚ムスタファ・ビン・ムスタファの見た明

治と明治の官僚渡辺洪基の見たオスマン帝国」

ロバート・ヘリヤー「世界史における明治維新…内戦の

「Postwar」の日米比較」

蔡龍保「明治期日本人の鉄道技術者集団の海外進出―台

湾を例に」

司会…牛村圭

コメント…ランジャナ・ムコパディヤヤ

セッション②「革命のグローバル史のなかの明治維新」

深町英夫「中国革命派の明治維新観…孫文を中心に」

朴薫「封建社会」…郡県社会」と東アジアにおける近

代…明治維新の捉え方と関連して」

マーク・ラヴィーナ「一九世紀の革命としての明治維新」

司会…三谷博

コメント…酒井啓子

特別講演…伊藤之雄「日本の近代化と公共性・天皇制」

二〇一八年一月五日

基調報告…シャネット・ハンター「明治日本と世界経済と

の関係…情報通信の組織化」

セッション③「文明」国の諸相」

ジョン・グリーン「明治天皇の勲章外交…一八六八年―

一八九四年」

劉岳兵「文明」として近代中国に輸出された「明治維

新」

マーガレット・メール「文明」国の音楽…四電訥治と

『音楽雑誌』を中心に」

司会…加藤雄三

コメント…大久保健晴

セッション④「明治の大衆文化」

石上阿希「春画をみつめる眼―大衆・近代・西洋」

古川綾子「日露開戦と日本喜劇の誕生」

アリステア・スウェール「明治初期における戯作の遺産と

文明開化への寄与」

司会…松田宏一郎

コメント…細川周平

セクション⑤「公共性の変容」

前田勉「公議輿論を生んだ読書会の公共性」

ダリル・フラハティ「代言人と公共性の比較史的再検討」

奈良勝司「幕末維新期の『公議』―近代国家建設におけ

る一致・統合・動員の観点から―

司会…塩出浩之

コメント…磯田道史

セクション⑥「ローカルからの明治史」

マーレン・エーラーズ「地域社会の固有性と普遍性―明治

維新前後の越前大野を例に―

デーヴィッド・ハウエル「明治維新时期における統治性」

一坂太郎「人物評をめぐる政治と学問」

司会…勝部真人

コメント…中村尚史

二〇一八年一月一六日

セクション⑦「世界は明治をどう見たか／見ているか」

ハサン・カマル・ハルブ「近代エジプトにおける明治日本

―『東方の太陽』を中心に―

グエン・ヴァー・クイン・ニュー「明治維新に関するベトナム

ムの近年の研究関心」

黄自進「中国近代化モデルとしての明治維新像…孫文と

蒋介石の日本認識の比較を中心に」

スージー・オング「一九三〇年代の日本とインドネシア…

インドネシア知識人と「日本精神」

司会…上野景文

コメント…永井史男

特別講演…北岡伸一「明治維新と現代」

ラウンドテーブル「国際日本研究の課題としての明治」

司会…清水唯一朗

問題提起…井上章一、ハラルド・フース、セルチュク・

エセンベル

コメント…長尾龍一

身体イメージの想像と展開―医療・美術・民間信仰の狭間で

(研究代表者 安井真奈美、ローレンス・マルソー)

〔共同研究者名〕

木場貴俊、石上阿希、井上章一、古川綾子、前川志織、

山田奨治、杉田智美、ハサン・カマル・ハルブ、朴眞

淑、ガリア・トドロヴァ・ペドコヴァ・ガブロフスカ、中

本剛二、蘆田宏、今井秀和、遠藤誠之、越智秀一、川橋範子、木森圭一郎、倉田誠、桑原牧子、香西豊子、鈴木則子、鈴木由利子、高橋淑子、田里千代、波平恵美子、松岡悦子、宮崎康子、エドワード・ドロット、坂則子

〔海外共同研究員名〕

金容儀、魯成煥、小碓美玲

〔研究発表〕

〈第一回研究会〉

二〇一八年五月二六日

遠藤誠之「産科医療における胎児―産科医の立場から」

鈴木由利子「胎児観の変遷―民俗学の立場から」

〈第二回研究会〉

二〇一八年九月八日

香西豊子「顔の裏―近世日本の病の診断術」

相田満「観相と異相」

二〇一八年九月九日

高橋淑子「顔の成り立ち―口裂けおぼけの謎を解く」

桑原牧子「皮膚を覆う、皮膚を裂く―タヒチのイレズミ

と皮膚」

〈第三回研究会〉

二〇一八年二月一日

木森圭一郎「江戸時代解剖図の造形性について―『解体新書』から『重訂解体新書』まで」

沢山美果子（ゲストスピーカー）「江戸の乳と生殖・胎児

観」

ジャスティン・フィ（ゲストスピーカー）「耳から声へ―

難聴とは、音が聴き取れないだけではない事」

二〇一八年二月二日

〈所外開催 細見美術館〉

「日文研コレクション」描かれた「わらい」と「こわい」展

―春画・妖怪画の世界―見学

解説・石上阿希、木場貴俊

〈第四回研究会〉

二〇一九年二月一日

シンディ・スターツスリラダン「大きい体、小さい体、不潔な体―現代日本における身体理解」

エレン・ナカムラ「入浴する身体と健康法―蘭方医の関寛

斎の思想を中心に」

エドワード・ドロット「時代と共に変貌する老体―江戸時

代までの医学における「老い」や「老化」

二〇一九年二月二日

ロドルフォ・マッジオ「配偶子のジェンダー…配偶子形成の時代におけるテクノ化された身体イメージ」

ミケラ・ケリー「国家の「身体」…第二次世界大戦の幼児かるたに描かれた日本臣民の身体の考察」

〈基幹共同研究〉

比較のなかの東アジアの王権論と秩序構想―王朝・帝国・国家、または、思想・宗教・儀礼―

〔研究代表者 伊東貴之〕

〔共同研究者名〕

倉本一宏、井上章一、瀧井一博、ジョン・ブリン、松田利彦、劉建輝、榎本渉、フレデリック・クレインス、マルクス・リュッターマン、佐野真由子、苅部直、青木隆、新井菜穂子、井上厚史、恩田裕正、垣内景子、橘川智昭、権純哲、小島毅、関智英、末木文美士、銭国紅、竹村英二、竹村民郎、田尻祐一郎、土田健次郎、永富青地、西澤治彦、長谷部英一、林文孝、松下道信、水口拓寿、横手裕、李梁、吾妻重二、新田元規、石

井剛、伊藤聡、井ノ口哲也、内山直樹、遠藤基郎、久保良峻、黒岩高、岸本美緒、児島恭子、近藤成一、佐々木愛、杉山清彦、高柳信夫、葭森健介、保立道久、李曉東、本間次彦、松野敏之、石川洋、澤井啓一、渡邊義浩、前田勉、渡辺美季、中純夫、古勝隆一、茂木敏夫、重田みち、周圓、田口由香、豊田裕章、山村奨

〔海外共同研究員名〕

張啓雄、葛兆光、手島崇裕、ベンジャミン・A・エルマン

〔研究発表〕

〈第一一回研究会〉

〔所外開催 東京大学文学部、公益財団法人斯文会・湯島聖堂〕

二〇一八年四月二二日

「朱舜水終焉の地」の碑を見学

水口拓寿「孔子廟のむこうに見える「日本」…台湾にお

ける為政者と官製メディアの言説から」

土田健次郎「正統・道統・治統・皇統」

二〇一八年四月二二日

公益財団法人斯文会・湯島聖堂にて、釋奠を見学

〈第一二回研究会〉

二〇一八年七月二八日

松野敏之「近世中国における割股と禁令」

新田元規「君主政体の成立起源論における「先有下而漸

有上」説―黄宗羲『明夷待訪録』「原君」の位置」

岸本美緒「東アジアにおける『擡頭』書式」

二〇一八年七月二十九日

周圓「二七―一八世紀における戦争と国際法の発展―法的側面からみる西洋と東洋の触れ合い」

〈第一三回研究会〉

二〇一八年十一月二十四日

山村奨「近代日本の陽明学理解の系譜」

杉山清彦「マンジュ（満洲）王朝としての大清帝国―「中

央ユーラシア」と「近世」との交叉―」

澤井啓一「礼秩序から祭祀共同体へ」

〈第一四回研究会〉

（所外開催 国士舘大学文学部）

二〇一九年一月二十六日

豊田裕章「中国の宮室・都城の礼制的構造の日本への影響について―前殿、三朝、國城の問題を中心に―」

王海燕「古代日本の治水紛擾―貞観八年の広野河事件を中心に―」

前田勉「『武威』の徳川国家の正統化―山鹿素行『中朝事

実』の仮想敵は誰か―」

二〇一九年一月二十七日

M・アドゥルフソン「"Methodology, Theory and Evidence in Japanese Historical Research"（日本史研究における方法・理論・史料）」

多文化間交渉における『あいだ』の研究

（研究代表者 稲賀繁美）

〔共同研究者名〕

榎本 渉、フレデリック・クレインス、石川肇、春藤 献一、片岡真伊、古川綾子、根川幸男、君島彩子、セシル・ラリ、杉田智美、飯窪秀樹、鶴戸聡、江口久美、大西宏志、岡本光博、小川さやか、隠岐さや香、小倉紀藏、金子務、九里文子、鞍田崇、近藤高弘、申昌浩、鈴木洋仁、莊千慧、滝澤修身、武内恵美子、竹村民郎、多田伊織、千葉慶、テレングト・アイトル、戸矢理衣奈、中村和恵、長門洋平、西原大輔、二村淳子、朴美貞、橋本順光、平松秀樹、平芳幸浩、藤原貞朗、ヘレナ・チャブコヴァー、堀まどか、松嶋健、三原芳秋、マ

シュー・ラーキング、山本麻友美、村中由美子、林久美子、森洋久、今泉宜子、林洋子、宮崎康子、郭南燕

〔海外共同研究員名〕

デンニツァ・ガブラコヴァ、近藤貴子、ミツヨ・デル  
クルーイトナガ

〈第一二回研究会〉

二〇一八年四月二一日

稲賀繁美「A. K. Comarswamy と日本・総論にかえて」

近藤貴子「世界美術からの逸脱か、または世界美術の解

放か―杉本博司の『歴史の歴史』展の考察から」

二〇一八年四月二二日

千葉慶「日活映画における「自己決定権」（戦後民主主義

受容と変容の問題として）をめぐるテーマ・再考―中

平康・蔵原惟繕・神代辰巳の作品を中心に」

鈴木洋仁「美学と社会学の【あいだ】外山正一を参照し

て」

〈第一二回研究会〉

二〇一八年五月二七日

二村淳子「仏印統治下における「技術」と「美術」

中村和恵「T. G. H. Strehlow 「世界の中心」と地元の長老

の間で」

春藤 猷一「動物愛護行政の理想と現実のあいだ―動物保  
護管理法の施行（一九七四）を事例に」

二〇一八年五月二八日

橋本 順光「偽史と物語のあいだ―インカ帝国日本起源説  
とその転用―」

近藤 高弘、山本 豊津（ゲストスピーカー）「消滅」―作  
為と無作為の間」

〈第一三回研究会〉

二〇一八年六月二三日

宮崎 康子「教えることと学ぶこと」

コメンテーター・デンニツァ・ガブラコヴァ

江口 久美「緋文化の再評価に関する学際的研究」

二〇一八年六月二四日

藤原 貞朗「どっちつかずの共和国の美術史編纂―前衛と

古典とフランス」

範麗雅（ゲストスピーカー）「伝統と現代のあいだ…王一

亭と一九二九年の日中芸術展覧会」

〈第一四回研究会〉

二〇一八年七月二七日

ミツヨ・デルクールライトナガ「porosite」

君島彩子「太平洋のマリア観音」

朴美貞「統営の螺鈿工芸、海峡を渡る」

二〇一八年七月二八日

戸矢理衣奈「東大での文理融合・社会連携の試みについて」

戸矢理衣奈「女性の身体意識の変容と空間、鏡…大正期を中心」

滝澤修身「あいだ」のイメージ—キリシタン時代を通じて—

### 近代東アジアの風俗史

(研究代表者 井上章一、斎藤光)

〔共同研究者名〕

劉建輝、石川肇、安井真奈美、申昌浩、永井良和、西

村大志、濱田陽、李珣淑、嘉本伊都子、加藤政洋、崔

吉城、矢原章、川井ゆう、岩井茂樹、井上雅人、長田

俊樹、木村立哉、仲万美子、橋爪節也、北浦寛之

〔研究発表〕

〈第三回研究会〉

二〇一八年六月二三日

井上章一「この研究へいどむ私のこころざし—服装史を

題材に—

二〇一八年六月二四日

李珣淑「朝鮮末以後の暮らしのしつらいとその変遷」  
斎藤光「カフェー研究の枠組みとカフェー表現」

〈第四回研究会〉

二〇一八年七月二八日

劉建輝「日文研所蔵画像資料の利用法」

崔吉城「慰安婦の真実、をめぐって」

〈第五回研究会〉

二〇一八年九月二九日

長田俊樹「風俗史研究とは何か」

申昌浩「戦間期モダンガールと日傘」

〈第六回研究会〉

二〇一八年十二月一日

川井ゆう「図版で見る菊人形」

井上章一「美少女のえがきかた」

二〇一八年十二月二日

永井良和「ダンサーの着物／芸妓のダンス」

斎藤光「モダンガール、あるいはカフェ再論」

〈第七回研究会〉

二〇一九年三月一六日

濱田陽「十二支と風俗」

木村立哉「目で見る阪東妻三郎プロダクションの痕跡」

二〇一九年三月一七日

橋爪節也「大正期の雑誌『道頓堀』のイラストに見る『大

大阪』成立直前の街の賑いー川、橋、劇場、芝居茶

屋、飲食店、御土産、文学、音楽、広告などー」

仲万美子「二〇世紀初頭の大連の商業広告にみる『女性』」

説話文学と歴史史料の間に

(研究代表者 倉本一宏)

〔共同研究者名〕

榎本渉、荒木浩、井上章一、呉座勇一、龔婷、堀井佳

代子、久葉智代、大橋直義、グエン・ヴー・クイン・

ニュー、東真江、石川久美子、上野勝之、内田滯子、

尾崎勇、追塩千尋、加藤友康、川上知里、木下華子、

小峯和明、佐藤信、佐野愛子、鈴木貞美、関幸彦、五

月女肇志、曾根正人、多田伊織、谷口雄太、葛尾和宏、

中町美香子、中村康夫、野上潤一、野本東生、白雲飛、  
樋口大祐、藤本孝一、古橋信孝、保立道久、前田雅之、  
松園斉、三舟隆之、山下克明

〔海外共同研究員名〕

グエン・ティ・オワイン、宋浣範、劉曉峰、魯成煥、

ゴ・フォン・ラン

〈第九回研究会〉

(所外開催 国立公文書館、明治大学グローバルフロント)

二〇一八年七月七日

石川久美子「みやび」伝播の伝承」

白雲飛「不思議なかささぎ(鶺鴒)の話ー中国の歴史書・

民間伝説から『今昔』へ」

グエン・ヴー・クイン・ニュー「日本の五節句とそのベト

ナムの伝説」

久葉智代「『万葉集』にみる「みやこ」と「ひな」への意

識」

小峯和明「再び・第三極の説話・話芸論へー〈説話本〉

の提唱」

〈第二〇回研究会〉

二〇一八年一〇月二〇日

榎本渉「高麗僧了然法明来日説の生成過程について」

谷口雄太「戦国期武田氏の対足利氏認識」

中町美香子『『今昔物語集』の平安京と「上わたり」「下わたり」』

荒木浩『『安養集』と源隆国の世界観再考』

呉座勇一「足利安王・春王の日光山逃避伝説の生成過程」

「かのように」という原理で形成してきた文通―「文書」概念や、その様式、記号、表象、意図性

(研究代表者 マルクス・リュッターマン)

〔共同研究者名〕

荒木浩、榎本渉、磯前順一、廣田浩治、梶谷真司、金

泰虎、小島道裕、宮原一成、森洋久、小口雅史、岡崎

敦、高橋一樹、ウィッテルン・クリスティアン

〔海外共同研究員名〕

ミヒヤエル・キンスキー

〈第一回研究会〉

二〇一八年六月九日

高橋一樹「古文書学と史料学のあいだ―日本中世文書を

対象として―」

二〇一八年六月一〇日

マルクス・リュッターマン「古文書と『かのように』―

語と非言語との関係―」

〈第二回研究会〉

二〇一八年一〇月一三日

史料を読む「艶書文例と堀河院艶書合との関係」

討論「艶書についての中近世文書研究とその他の文化研究の可能性に關連づけて」

二〇一八年一〇月一四日

討論「古文書と『かのように』―愛・恋・情の記号を考える―」

〈第三回研究会〉

二〇一九年一月二六日

史料を読む―状を主人へまいらす事『今川大双紙』・『宗

五大卿紙』他

分析・解釈

討論

二〇一九年一月二七日

研究論文を読む―E. Sue Savage-Rumbaugh, Shelly L.

Williams, Takeshi Furuchi, Takayoshi Kano: "Language

perceived: Paniscus branches out," William C. McGrew,  
Linda F. Marchant, Toshisada Nishida (ed): Great Ape  
Societies, Cambridge: Cambridge University Press, pp.  
173-84

討論

縮小・分断・貧困社会の文化創造

(研究代表者 山田奨治)

〔共同研究者名〕

松田利彦、佐野真由子、吉村和真、田村美由紀、谷川  
建司、小川さやか、荻野幸太郎、太下義之、沢田眉香  
子、服部正、松村圭一郎

〈第一回研究会〉

二〇一八年八月五日

全体説明、自己紹介、話題提供、意見交換

〈第二回研究会〉

二〇一八年九月二八日

ドキュメンタリー映画「春画と日本人」上映

コメント・荻野幸太郎、早川聞多(ゲストスピーカー)

二〇一八年九月二九日

日文研所蔵春画特別見学会

解説・早川聞多(ゲストスピーカー)

日本における法・政治・宗教の相互関係―近代世界・現代世  
界との比較の視座による研究

(研究代表者 荻部直)

〔共同研究者名〕

瀧井一博、西田彰一、西山由理花、ジョン・グリーン、  
梅田百合香、神江沙蘭、白幡俊輔、毛利透、安武真隆、  
山口輝臣

〈第一回研究会〉

二〇一八年四月一四日

荻部直「国家と「宗教」―近代日本の場合」

〈第二回研究会〉

二〇一八年八月二日

大石眞(ゲストスピーカー)「日本における国家・宗教関  
係の諸相―公法学のアプローチ」

二〇一八年八月三日

梅田百合香「ホッブズの『教会史』から見た法、政治、  
宗教」

白幡俊輔「ルネサンス君主論を読み直す―近世城郭都市と

政治権力―」

〈第三回研究会〉

(所外開催) 伊勢神宮外宮・伊勢神宮内宮・倉田山・麻吉旅館、

伊勢パールピアホテル会議室・二見浦・賓日館)

伊勢神宮、外宮・内宮・倉田山の見学

講演・解説・音羽悟(ゲストスピーカー)

二〇一九年三月四日

ジョン・ブリーン、谷口裕信(ゲストスピーカー)「近代

天皇制と大麻」

司会・瀧井一博

二〇一九年三月五日

西田彰一「寛克彦の神道理論」

司会・安武真隆

コメント・毛利透

伊勢市視察

(文責・研究協力課)

基礎領域研究

英文日本歴史研究書講読(継続)

代表者 牛村圭

概要 達意の英語で書かれた日本史研究書を素材に、英文を正しく読み、自然な日本語にする手法の修得を目指す。

中世文学講読(継続)

代表者 荒木浩

概要 中世文学の影印本の読解を軸に、古典テキストの研究方法を考察する。

韓国語の運用(基礎・応用)(継続)

代表者 松田利彦

概要 業務や研究で韓国語を必要とする職員・大学院生等を対象に韓国語の会話・作文・読解の習得を目指した授業を行う。

古記録学基礎研究(継続)

代表者 倉本一宏

概要 日本前近代の根幹的史料である古記録の解説を、原本や写本の見方・扱い方も含めて考えていく。

フランス語基礎運用（初級）（継続）

代表者 稲賀繁美

概要 初心者を対象として、初歩の運用能力を実践的に身に付ける。教科書としては当該年度のNHKラジオ講座教材の準備を参加者各自に願う。他の教材は現場で提供する。

フランス語読解補助・論文作成指南（中級）（継続）

代表者 稲賀繁美

概要 中級以上の実務能力開発、論文作成の手ほどきをする。教材については、受講生との相談のうえで決定する。

文学・文化史理論入門（継続）

代表者 坪井秀人

概要 文学および文化史に関する基礎的な理論を学びながらテキストの読解・分析の実践的方法を修得する。

近現代史史料文献研究（継続）

代表者 瀧井一博

概要 日本近現代史の基礎史料と古典的および先端的な文献を講読し、社会科学的历史研究の方法と実践を討究する。

中国古典学の基礎（新規）

代表者 伊東貴之

概要 経書を中心とするオーソドックスな中国古典語の文献を中国音と訓読とを併用して読解する技法を涵養する。併せて中国古典学や儒教入門のための道案内とする。

宗教学基礎論（新規）

代表者 磯前順一

概要 聖俗論、世俗主義論、宗教概念論、禁忌論など、宗教学の基本的な主題を、近代政治史の文脈にのせて議論を行なう。丹念なテキスト講読が中心。

# 彙報

(平成三〇年四月一日)

平成三二年三月三十一日)

## 人事異動

- ◎平成三〇年四月一日 採用  
助教 古川綾子
- 機関研究員 光平有希
- 機関研究員 小田龍哉
- ◎平成三〇年四月一日 契約更新  
特任助教 前川志織
- ◎平成三〇年四月一日 併任  
副所長 劉建輝
- 副所長 荒木浩
- 研究調整主幹 荒木浩
- 研究調整主幹 伊東貴之
- 研究調整主幹 磯前順一
- 情報管理施設長 山田奨治
- 海外研究交流室長 松田利彦

総合情報発信室長 山田奨治  
インスティテューション・リサーチ室長  
荒木浩

特任助教 石上阿希

◎平成三〇年四月一日 契約

- 外国人研究員 楊春華(南開大学准教授)
- 外国人研究員 鄭炳浩(高麗大学校教授)
- 外国人研究員 朴眞淑(忠北大学正教授)
- 外国人研究員 楊際開(杭州師範大学専任  
研究員)
- 外国人研究員 金日林(韓国藝術綜合学校  
非常勤講師)

◎平成三〇年四月一日 委嘱

- 客員教授 佐野真由子(京都大学教授)
- 客員教授 荻部直(東京大学教授)
- 客員准教授 鍾以江(東京大学准教授)
- 客員准教授 奈良勝司(立命館大学助教)
- 客員准教授 飯窪秀樹(外務省外交記録審  
査員)

◎平成三〇年五月一日 契約

外国人研究員 王海燕(浙江大学教授)

◎平成三〇年五月三十一日 契約期間満了  
外国人研究員 ビーター・ザロー(コネチ  
カット大学教授)

◎平成三〇年七月二七日 委嘱

- 客員准教授 大橋直義(和歌山大学准教授)
- ◎平成三〇年六月一日 採用  
技術補佐員 阿部英津子
- ◎平成三〇年六月三〇日 契約期間満了  
外国人研究員 ハサン・カマル・ハルブ(エ  
ジプト国立カイロ大学准教授)

◎平成三〇年七月一日 採用  
教授 関野樹

◎平成三〇年七月一日 契約

- 外国人研究員 マウリシオ・マルティネス  
ロドリゲス(元コロンビア工科大学講師)
- ◎平成三〇年七月三十一日 契約期間満了  
外国人研究員 デイック・ステゲウエルンス  
(オスロ大学准教授)

◎平成三〇年八月一日 契約

外国人研究員 ケラー・キンブロー(コロラ  
ド大学教授)

外国人研究員 阿部万里江（ポストン大学  
准教授）

◎平成三〇年八月三十一日 契約期間満了

外国人研究員 潘世聖（華東師範大学教授）

外国人研究員 周耘（武漢音楽学院教授）

◎平成三〇年九月一日 契約

外国人研究員 孫衛國（南開大学教授）

外国人研究員 佐藤ロロスベアグナナ（ロン  
ドン大学准教授）

◎平成三〇年九月三〇日 契約期間満了

外国人研究員 蔡敦達（同済大学教授）

◎平成三〇年十一月三〇日 契約期間満了

外国人研究員 ローレンス・マルソー（オー  
克蘭ド大学上級講師）

◎平成三〇年十一月三十一日 契約期間満了

外国人研究員 佐藤ロロスベアグナナ（ロン  
ドン大学准教授）

◎平成三一年一月一日 契約

外国人研究員 孫江（南京大学教授）

外国人研究員 リーダー・津野田典子（マ  
リアミ大学教授）

◎平成三一年二月二十八日 契約期間満了

外国人研究員 朴真淑（忠北大学正教授）

◎平成三一年三月二十七日 契約期間満了

外国人研究員 孫春日（延辺大学校教授）

◎平成三一年三月三十一日 定年退職

教授 パトリシア・フィスター

◎平成三一年三月三十一日 辞職

助教 吉江弘和

◎平成三一年三月三十一日 契約期間満了

外国人研究員 楊春華（南開大学准教授）

外国人研究員 鄭炳浩（高麗大学校教授）

外国人研究員 楊際開（杭州師範大学専任研  
究員）

外国人研究員 金日林（韓国藝術綜合学校  
非常勤講師）

外国人研究員 阿部万里江（ポストン大学  
准教授）

◎平成三一年三月三十一日 任期満了退職

技術補佐員 久米舞子

◎平成三一年三月三十一日 委嘱期間満了

客員教授 吉村和真（精華大学副学長／教授）

客員教授 三澤真美恵（日本大学教授）

客員教授 佐野真由子（京都大学教授）

客員教授 苅部直（東京大学教授）

客員准教授 加藤雄三（専修大学准教授）

客員准教授 羽鳥隆英（新潟大学助教）

## 日文研フォーラム

第三二〇回「平成三〇年四月一〇日（火）」

発表者 蔡敦達（上海杉達学院教授／日文  
研外国人研究員）

テーマ 重々たる法界 目前に彰（あき）ら  
かなり——禅院の塔頭（たっちゅう）にお  
ける「境致」の選定

コメンテーター 井上章一教授

第三二一回「平成三〇年五月八日（火）」

発表者 デイック・ステグウエルンス（ノル  
ウェー国立オスロ大学准教授／日文研外国  
人研究員）

テーマ 日本国民の戦争記憶をめぐる映画戦  
争

コメンテーター 細川周平教授

- 第三二二回「平成三〇年六月二日(火)」  
 発表者 潘世聖(華東師範大学教授/日  
 研外国人研究員)  
 テーマ 嘉納治五郎と近代中国——時代を超  
 えた知性と智慧  
 コメンテーター 伊東貴之教授
- 第三二三回「平成三〇年九月一日(火)」  
 発表者 鄭炳浩(高麗大学校日語日文学科  
 教授/日研外国人研究員)  
 テーマ 日本と韓国における「災難文学」の  
 比較とその文化的背景  
 コメンテーター 坪井秀人教授
- 第三二四回「平成三〇年十一月一日(火)」  
 発表者 楊春華(南開大学周恩来政府管理  
 学院准教授/日研外国人研究員)  
 テーマ 高齢化するアジア社会における家族  
 の変容——日本の過疎地の高齢者福祉に関  
 する調査研究  
 コメンテーター 落合恵美子(京都大学教  
 授)
- 第三二五回「平成三一年一月二日(金)」
- 発表者 ケラー・キンブロー(コロラド大学  
 教授/日研外国人研究員)  
 テーマ 猫鬼の話——お伽草子『酒吞童子』  
 と近世のパロディー絵巻  
 コメンテーター 伊藤慎吾(國學院大學非  
 常勤講師/日研客員准教授)
- 第三二六回「平成三一年二月二日(火)」  
 発表者 王海燕(浙江大学人文学院歴史系  
 教授/日研外国人研究員)  
 テーマ 古代日本の国際交流における動物の  
 贈答——ラクダ・羊を中心に  
 コメンテーター 伊東貴之教授
- 第三二七回「平成三一年三月二日(火)」  
 発表者 楊際開(杭州師範大学国学院専任  
 研究員/日研外国人研究員)  
 テーマ 近代中国革命の思想的起源——日本  
 からの建国思想の受容を中心に  
 コメンテーター 瀧井一博教授
- 木曜セミナー
- 第二四六回「平成三〇年四月一九日(木)」
- 発表者 劉建輝副所長、ジョン・ブリー  
 ン教授、ロバート・ヘリヤー(ウェイク・  
 フォレスト大学准教授/日研外来研究員)  
 テーマ 世界史の中の明治維新  
 コメンテーター 瀧井一博教授
- 第二四七回「平成三〇年五月二四日(木)」  
 発表者 アルバロ・ダビド・エルナンデス・  
 エルナンデスプロジェクト研究員  
 テーマ 大衆文化・メキシコプロジェクトの  
 経験とトランスローカリティの模索
- 第二四八回「平成三〇年六月二日(木)」  
 発表者 木場貴俊プロジェクト研究員  
 テーマ 近世学問における怪異  
 コメンテーター 安井真奈美教授
- 第二四九回「平成三〇年七月一九日(木)」  
 発表者 松田利彦教授、牛村圭教授、宇野  
 田尚哉(大阪大学教授)  
 テーマ 「国際日本研究」コンソーシアムを考  
 える——『なぜ国際日本研究なのか』書評会
- 第二五〇回「平成三〇年九月二〇日(木)」  
 発表者 山田奨治教授、倉本一宏教授、井

上章一教授

- テーマ 日文研の共同研究成果報告(第一回)  
第二五一回 [平成三〇年十一月二十九日(木)]  
発表者 松田利彦教授、荒木浩副所長、白石  
恵理助教、藤川剛研究協力課研究支援係  
係長
- テーマ 第三回東アジア日本研究者協議会  
際学術大会を終えて
- 第二五二回 [平成三〇年十二月二〇日(木)]  
発表者 関野樹教授
- テーマ 昔の日付をコンピュータでいかに扱  
うか? — 「時間情報学」という新たな考  
え方
- 第二五三回 [平成三一年一月二十四日(木)]  
発表者 大塚英志教授、劉建輝副所長、山田  
奨治教授、安井 眞奈美教授、木場 貴俊  
プロジェクト研究員
- テーマ 日文研の共同研究成果報告(第二回)  
第二五四回 [平成三一年二月二一日(木)]  
発表者 稲賀繁美教授、牛村圭教授、瀧井  
一博教授、坪井秀人教授

テーマ 日文研で学ぶこと／学べること —  
基礎領域研究の挑戦

**Nichibunken Evening Seminar**

- 第二二六回 [平成三〇年四月五日(木)]  
発表者 ハサン・カマル・ハルブ(エジプト  
国立カイロ大学文学部准教授／日文研外国  
人研究員)
- テーマ The Enlightenment of Scientific  
Knowledge in Early Meiji: Fukuzawa Yukichi  
(1835-1901)
- 第二二七回 [平成三〇年五月一〇日(木)]  
発表者 アンドレア・ジョライ(日文研外来  
研究員(日本学術振興会研究員))
- テーマ The Interrelation of Academic and  
Artistic Approaches to the Reconstruction of  
Japanese Court Music: From Historiographies  
to Historiophones
- 第二二八回 [平成三〇年六月七日(木)]  
発表者 ラウリ・キッニック(京都大学人  
間・環境学研究所 日本学術振興会外国人

特別研究員)

テーマ Scenario Culture: Rethinking Authors  
and Audiences of Postwar Japanese Cinema

第二二九回 [平成三〇年七月五日(木)]

発表者 ローレンス・マルソー(オークラン  
ド大学日本研究上級講師／日文研外国人研  
究員)

テーマ Illustrating *Asop: The Tales of Isopo*  
*Scrolls* and Transformation of the Mediterr-  
anean World into the Chinese Visual Field

第二三〇回 [平成三〇年九月六日(木)]

発表者 アンナ・アンドレーワ(ハイデルバ  
ルグ大学ハイデルベルグ超文化史研究セン  
ター研究員／日文研外来研究員)

テーマ Buddhist Expertise on Embryology,  
Childbirth, and Women's Health in Medieval  
Japan

第二三一回 [平成三〇年十一月八日(木)]

発表者 稲賀繁美教授

テーマ A. K. Coomaraswamy and Japan: A  
Link between Colonial India and Annexed

## Korea

第二三二回 [平成三〇年二月六日(木)]

発表者 マウリシオ・マルティネス・ロドリ

ゲス(日文研外国人研究員)

テーマ Japanese Folk Performing Arts as

Intangible Heritage

第二三三回 [平成三一年二月七日(木)]

発表者 セシル・ラリ(日文研外来研究員

(日本学術振興会研究員))

テーマ The Kites of Shirone—How to Make

a Small City Known Worldwide

第二三四回 [平成三一年三月七日(木)]

発表者 ショリオン・トーマス(ペンシル

ヴァニア大学准教授)

テーマ Legacies of Religious Freedom in

American-Occupied Japan—State Shintō, New

Religions, and Buddhist War Responsibility

## 学術講演会

第六七回 [平成三一年三月八日(金)]

講演者 前川志織特任助教

テーマ 子どもをめぐるグラフィックデザイ

ン——日本の洋菓子広告をてがかりに

講演者 パトリシア・フィスター教授

テーマ 京都の尼僧像にそそぐ光明——尼門

跡寺院の新たな歴史をひらく

司会 荒木浩副所長

## 日文研・アイハウス連携フォーラム

第一四回 [平成三〇年七月二七日(金)]

講演者 細川周平教授

テーマ 日系ブラジル社会の集いーカラオ

ケ、映画、俳句

第一五回 [平成三〇年二月五日(水)]

講演者 鈴木岩弓(東北大学総長特命教授

／日文研客員教授)

テーマ 『現代用語の基礎知識』からみた戦

後日本の「宗教史」

第一六回 [平成三一年二月二〇日(水)]

講演者 牛村圭教授

テーマ 明治日本オリピック事始めース

ポーツ文明論試論

## 一般公開

[平成三〇年一月二三日(金・祝)]

テーマ 京都と時代劇

【細川ガラシャの美しきーいつ、誰が彼女を

美しくえがきだしたのかー】

登壇者 小田豊前長岡京市長、井上章一

教授、フレデリック・クレインス准教授、

郭南燕元日文研准教授

司会 石上阿希特任助教

【中島貞夫に聞くー時代劇映画を、今あえて

世に問う訳、その魅力とはー】

登壇者 中島貞夫映画監督、小川順子中部

大学教授、井上章一教授

司会 細川周平教授

【夢の大地への誘い——地図と写真が語る満洲

の実像と虚像】

講師 劉建輝副所長

【歴史研究者が語る時代劇の愉しみ方】

講師 木場貴俊プロジェクト研究員

【一九二〇・三〇年代日本の映画と広告】

講師 前川志織特任助教

国際研究集会

〔平成三〇年一二月一四日(金)～一六日(日)〕

テーマ 世界史のなかの明治／世界史についての明治

研究代表者 瀧井一博教授

海外シンポジウム

〔平成三〇年一〇月二六日(金)〕

テーマ 日本研究再考―グローバルな文脈から―

場所 日文研

レクチャー

第一五六回〔平成三二年一月一八日(金)〕

発表者 汪暉(清華大学人文社会科学学院

教授)

テーマ The Beginning of the Century: Imperialism, Nationalism and Cosmopolitanism in

Early 20th Century China

コメンテーター 劉建輝副所長

司会 磯前順一教授、榎本渉准教授

第一五七回〔平成三二年二月一五日(金)〕

発表者 郭連友(北京外国語大学北京日本

研究センター センター長・教授)

テーマ 吉田松陰と太平天国(一八五一―

一八六四)

コメンテーター 伊東貴之教授

司会 劉建輝副所長

会議

運営会議

第四九回 平成三〇年

第五〇回 平成三〇年

第五一回 平成三一年

調整会議

第二九七回 平成三〇年

第二九八回 平成三〇年

第二九九回 平成三〇年

第三〇〇回 平成三〇年

第三〇一回 平成三〇年

第三〇二回 平成三〇年

第三〇三回 平成三〇年

第三〇四回 平成三〇年

第三〇五回 平成三〇年

第三〇六回 平成三〇年

第三〇七回 平成三〇年

第三〇八回 平成三〇年

第三〇九回 平成三〇年

第三一〇回 平成三〇年

第三一一回 平成三〇年

第三一二回 平成三〇年

第三一三回 平成三一年

第三一四回 平成三一年

第三一五回 平成三一年

第三一六回 平成三一年

第三一七回 平成三一年

第三一八回 平成三一年

センター会議

第二九七回 平成三〇年

六月 六日(水)

六月 九日(火)

七月 四日(水)

七月 八日(水)

九月 五日(水)

九月 九日(水)

一〇月 三日(水)

一〇月 七日(水)

十一月 七日(水)

十一月 二八日(水)

十二月 五日(水)

(開催中止)

十二月 九日(水)

一月 九日(水)

一月 二三日(水)

二月 六日(水)

二月 二〇日(水)

三月 六日(水)

三月 一九日(火)

四月 五日(木)

- 第二九八回 平成三〇年 四月一九日(木)
- 第二九九回 平成三〇年 五月一〇日(木)
- 第三〇〇回 平成三〇年 五月二四日(木)
- 第三〇一回 平成三〇年 六月 七日(木)
- 第三〇二回 平成三〇年 六月二一日(木)
- 第三〇三回 平成三〇年 七月 五日(木)
- 第三〇四回 平成三〇年 七月一九日(木)
- 第三〇五回 平成三〇年 九月 六日(木)
- 第三〇六回 平成三〇年 九月二〇日(木)
- 第三〇七回 平成三〇年 一〇月 四日(木)
- 第三〇八回 平成三〇年 一〇月一八日(木)
- 第三〇九回 平成三〇年 一〇月 八日(木)
- 第三一〇回 平成三〇年 一一月二九日(木)
- 第三一一回 平成三〇年 一二月 六日(木)
- 第三一二回 平成三〇年 一二月二〇日(木)
- 第三一三回 平成三一年 一月一〇日(木)
- 第三一四回 平成三一年 一月二四日(木)
- 第三一五回 平成三一年 二月 七日(木)
- 第三一六回 平成三一年 二月二一日(木)
- 第三一七回 平成三一年 三月 七日(木)
- 第三一八回 平成三一年 三月二〇日(水)
- 外国人来訪者**
- 平成三〇年七月二三日 復旦大学志徳書院ご一行、計二四名
- 平成三〇年一〇月一八日 黄恭萱(台湾大学文学学院院长)、他四名
- 平成三〇年一一月九日 潘淑滿(国立台湾師範大学国際与社会科学学院院长)、他三名
- 平成三〇年一一月一九日 国際交流基金関西国際センター・平成三〇年度専門日本語研修(文化・学術専門家)ご一行、計一八名
- 平成三〇年一二月四日 国際交流基金関西国際センター・平成三〇年度ロシア若手研究者育成プログラム参加者ご一行、計一二名
- 海外渡航**
- マルクス・リュッターマン 教授  
目的 ハンブルグ大学 Centre for the Study of Manuscript Cultures にてシンポジウムに参加し発表
- 目的国 ドイツ
- 期間 平成三〇年四月一〇日～一七日
- 荒木浩 教授  
目的 ラトビア大学にてカンファレンスに参加し基調講演
- 目的国 ラトビア
- 期間 平成三〇年四月一二日～一七日
- 楠綾子 准教授  
目的 ラトビア大学にてカンファレンスに参加し基調講演
- 目的国 ラトビア
- 期間 平成三〇年四月一二日～一七日
- 松田利彦 教授  
目的 国立中央図書館にて資料・論文調査、ソウル大学校にて博士学位請求論文審査、国会図書館にて雑誌記事調査
- 目的国 韓国
- 期間 平成三〇年四月一九日～二一日
- 坪井秀人 教授  
目的 イェール大学にて講演、ワークショップに参加及び同大教授と共同研究の

打ち合わせ

目的国 アメリカ

期間 平成三〇年四月二六日～五月一日

稲賀繁美 教授

目的 Chelsea College of Arts にシンポジウムに参加、資料調査及び打ち合わせ

目的国 イギリス

期間 平成三〇年五月一日～七日

坪井秀人 教授

目的 オーストリア国立図書館及びウィーン市立図書館にて資料調査、ウィーン大学アジア学研究所にてレクチャー

目的国 オーストリア

期間 平成三〇年五月五日～一〇日

山田奨治 教授

目的 浙江工商大学にてカンファレンスに参加し研究発表

目的国 中国

期間 平成三〇年五月二五日～二八日

榎本渉 准教授

目的 成均館大学校にて学術大会に参加し

基調講演

目的国 韓国

期間 平成三〇年五月二五日～二七日

劉建輝 教授

目的 北京大学にて国際シンポジウムに参加し講演、北京語言大学、北京師範大学、清華大学及び中国社会科学院にて打ち合わせ

目的国 中国

期間 平成三〇年六月一日～七日

松田利彦 教授

目的 漢陽大学にてシンポジウムに参加し発表、韓国国立中央図書館にて雑誌記事調査

目的国 韓国

期間 平成三〇年六月七日～一〇日

坪井秀人 教授

目的 ワシントン大学にてワークショップに参加及び集中セミナーで講義

目的国 アメリカ

期間 平成三〇年六月八日～一四日

磯前順一 教授

目的 北華大学研究会にて講演、長春市の皇居及び博物館を見学、清華大学高等研究所にて調査

目的国 中国

期間 平成三〇年七月六日～一日

坪井秀人 教授

目的 国立交通大学にてサマースクールの招聘を受けて講演及びセミナーリーダーとしてセミナーに参加

目的国 台湾

期間 平成三〇年七月八日～一四日

呉座勇一 助教

目的 ヤクートク北東連邦大学にて学術大会に参加

目的国 ロシア

期間 平成三〇年七月一〇日～一七日

榎本渉 准教授

目的 保国寺古建築博物館にて学芸員と意見交換、東畧村にて聞き取り調査、長嶼砲台古採石場、蛇蟠島にて調査、三門県博物

## 館にて展示品調査

目的国 中国

期間 平成三〇年七月一四日～一九日

瀧井一博 教授

目的 中国社会科学院にて調査及び講演、

南開大学にて国際シンポジウムに参加し報

告

目的国 中国

期間 平成三〇年七月二五日～三〇日

松田利彦 教授

目的 カリフォルニア大学バークレー校、

スタンフォード大学フーバー研究所、日米

史料館、Military Intelligence Service His-

toric Learning Center、ミネソタ大学、カー

ルトンカレッジ及びメイヨークリニックに

て資料調査

目的国 アメリカ

期間 平成三〇年八月一日～一〇日

大塚英志 教授

目的 中国国家図書館にて調査の下見、文

献調査及び整理

目的国 中国

期間 平成三〇年八月二日～七日

坪井秀人 教授

目的 慶熙大学校にて研究発表に参加、仁

川アートブラットホームにて講演に参加、

講演関連施設等の見学及び調査

目的国 韓国

期間 平成三〇年八月一三日～一六日

伊東貴之 教授

目的 北京大学にて世界哲学大会に参加し

研究報告及び各種Session等に参加し交流

及び情報収集

目的国 中国

期間 平成三〇年八月一三日～二〇日

稲賀繁美 教授

目的 India International Centreにて国際

シンポジウムに参加し発表、エローラ石窟

群、アジャンター石窟群にて現地調査

目的国 インド

期間 平成三〇年八月一五日～二日

楠綾子 准教授

目的 国連本部にて見学及びインタ

ビュー、国立公文書館、議会図書館にて史

料調査及び情報収集

目的国 アメリカ

期間 平成三〇年八月一六日～二六日

荒木浩 教授

目的 ハンブルグ大学にて国際フォーラム

に参加し発表

目的国 ドイツ

期間 平成三〇年八月一九日～二六日

坪井秀人 教授

目的 ライデン大学にてワークショップに

参加し報告、チューローンコン大学にて

シンポジウムで基調講演及び大学院生に個

人指導

目的国 オランダ、タイ

期間 平成三〇年八月一九日～三一日

関野樹 教授

目的 INTEKMA Resort &amp; Convention Cen-

ter (Selangor Darul Ehsan) 及び 3rd Inter-

national Workshop on the Academic Asset  
Preservations and Sharing in Southeast Asia

の準備及び参加

目的国 マレーシア

期間 平成三〇年八月二日～二五日

小松和彦 所長

目的 漢陽大学校日本学国際比較研究所にて  
て大衆文化研究に関する発表・研究討議及  
び情報交換

目的国 韓国

期間 平成三〇年八月二四日～二七日

山田奨治 教授

目的 漢陽大学校にて国際学術大会に参加  
し基調講演及び出版についての打ち合わせ

目的国 韓国

期間 平成三〇年八月二四日～二八日

呉座勇一 助教

目的 ベルリン自由大学にて日本研究者会  
議に参加

目的国 ドイツ

期間 平成三〇年八月二八日～九月二日

伊東貴之 教授

目的 中山大学にてシンポジウム打ち合わせ、  
国際シンポジウムに参加し研究報告、  
交流及び情報収集

目的国 中国

期間 平成三〇年九月六日～九日

瀧井一博 教授

目的 ウィーン軍事史博物館、ウィーン世  
界博物館にて史料調査、ウィーン大学にて  
国際議会史研究会 (ICRPI) に参加し研究  
報告、シヨブロン市議会視察

目的国 オーストリア、ハンガリー

期間 平成三〇年九月七日～一三日

松田利彦 教授

目的 国立中央図書館にて所蔵資料調査、  
ソウル大学校にて博士学位申請論文第二次  
審査に参加、科研課題に係る打ち合わせ及  
び意見交換

目的国 韓国

期間 平成三〇年九月二〇日～二二日

ジョン・ブリーン 教授

目的 シンガポール国立大学にて国際学会  
に参加し研究発表

目的国 シンガポール

期間 平成三〇年九月二四日～二九日

小松和彦 所長

目的 清華大学人文社会科学高等研究所、  
北京外国語大学日本学研究中心、北京師範  
大学にて大衆文化研究国際ワークショップ  
プ・シリーズ講座開催

目的国 中国

期間 平成三〇年九月二四日～二九日

劉建輝 教授

目的 清華大学人文社会科学高等研究所、  
北京外国語大学日本学研究中心、北京師範  
大学にて大衆文化研究国際ワークショップ  
プ・シリーズ講座開催、北京市内にて調査  
及び資料収集

目的国 中国

期間 平成三〇年九月二四日～一〇月一日

荒木浩 教授

目的 清華大学人文社会科学高等研究所、  
北京外国語大学日本学研究中心、北京師範  
大学にて大衆文化研究国際ワークショップ  
プ・シリーズ講座開催

目的国 中国

期間 平成三〇年九月二四日～一〇月一日

大塚英志 教授

目的 清華大学人文社会科学高等研究所、  
北京外国語大学日本学研究中心、北京師範  
大学にて大衆文化研究国際ワークショップ  
プ・シリーズ講座開催

目的国 中国

期間 平成三〇年九月二四日～二七日

細川周平 教授

目的 清華大学人文社会科学高等研究所、  
北京外国語大学日本学研究中心、北京師範  
大学にて大衆文化研究国際ワークショップ  
プ・シリーズ講座開催

目的国 中国

期間 平成三〇年九月二四日～二八日

安井眞奈美 教授

目的 清華大学人文社会科学高等研究所、  
北京外国語大学日本学研究中心、北京師範  
大学にて大衆文化研究国際ワークショップ  
プ・シリーズ講座開催

目的国 中国

期間 平成三〇年九月二四日～一〇月一日

前川志織 特任助教

目的 清華大学人文社会科学高等研究所、  
北京外国語大学日本学研究中心、北京師範  
大学にて大衆文化研究国際ワークショップ  
プ・シリーズ講座開催

目的国 中国

期間 平成三〇年九月二四日～一〇月一日

倉本一宏 教授

目的 ベトナム社会科学アカデミー(VASS)  
にて国際シンポジウムに座長として参加し  
研究発表及び論文集作成に係る打ち合わ  
せ、ハノイ・タンロン城遺跡にて現地調査

目的国 ベトナム

期間 平成三〇年九月二四日～二八日

坪井秀人 教授

目的 ハバロフスク市内にて『日本新聞』  
編集印刷跡地、その他日本人抑留関係地を  
視察及び市内在住の抑留経験者と面談、リ  
ストヴァンカにて抑留関係地を視察、イル  
クーツク国立大学にて教授及び研究者から  
のレクチャー

目的国 ロシア

期間 平成三〇年九月二五日～一〇月一日

小松和彦 所長

目的 漢陽大学校にて記念講演及び学術交  
流

目的国 韓国

期間 平成三〇年一〇月四日～五日

小松和彦 所長

目的 韓国中央大学の依頼によりトッケビ  
マウル(韓国妖怪村)にて妖怪に関する講  
演及び学術交流

目的国 韓国

期間 平成三〇年一〇月一〇日～一二日

楠綾子 准教授

目的 メキシコ自治大学にて International Colloquium of Mexican and Japanese Studies に参加、日本研究機関や国際交流基金にてアリング

目的国 メキシコ

期間 平成三〇年一〇月一六日～二〇日

劉建輝 教授

目的 復旦大学、上海財經大学、華東師範大学及び上海交通大学にて研究打ち合わせ及び復旦大学にてフォーラムに参加し研究発表

目的国 中国

期間 平成三〇年一〇月一六日～二二日

吳座勇一 助教

目的 高麗大学日本学研究センターの招聘によりソウル女子大学校にてレクチャーの特別講演

目的国 韓国

期間 平成三〇年一〇月二一日～二四日

関野樹 教授

目的 San Diego State University にて打ち合わせ、Fort Mason Center にて打ち合わせ、PNC2018 Annual Conference and Joint Meetings に参加し打ち合わせ及び検討

目的国 アメリカ

期間 平成三〇年一〇月二三日～一二月二日

大塚英志 教授

目的 中国 中国国家図書館にて文献の調査及び整理

目的国 中国

期間 平成三〇年一〇月二九日～三一日

榎本涉 准教授

目的 広東海上絲綢之路博物館、香港海事博物館にて調査

目的国 中国

期間 平成三〇年一一月一日～四日

稲賀繁美 教授

目的 カリフォルニア大学サンディエゴ校にて国際シンポジウムに参加し発表、サン

フランススコ近代美術館、サンフランシス

目的国 アメリカ

期間 平成三〇年一一月一日～七日

荒木浩 教授

目的 中国人民大学にて説話文学会特別大会に司会として参加し研究交流

目的国 中国

期間 平成三〇年一一月二日～六日

倉本一宏 教授

目的 韓国国立中央博物館にて講演

目的国 韓国

期間 平成三〇年一一月一五日～一六日

坪井秀人 教授

目的 高麗大学校にて国際会議に参加し講演

演

目的国 韓国

期間 平成三〇年一一月一五日～一七日

坪井秀人 教授

目的 インドネシア大学にてワークショップに参加し基調講演、ル・メルディアン・

ホテルにてASEAN日本学会に参加、パリ  
Reid Hallにてワークショップに参加し報  
告、フランス国立東洋言語文化学院  
(INALCO)にて講義、パリ内外のフラン  
スの日本文学研究者とプロジェクトについ  
ての打ち合わせ

目的国 インドネシア、フランス

期間 平成三〇年二月四日～一三日

稲賀繁美 教授

目的 パリ国立図書館等にて資料調査、パ  
リ第八大学にて博士論文審査、ソルボンヌ  
大学アジア研究センター(CREOS)にて  
シンポジウムに参加し発表及び司会

目的国 フランス

期間 平成三〇年二月一四日～二四日

関野樹 教授

目的 国立歴史博物館、故宮博物院にて調  
査、政大華人文化主體性研究中心にて研究  
打ち合わせ及びシンポジウムに参加、中央  
研究院にて研究打ち合わせ

目的国 台湾

期間 平成三〇年二月一五日～一九日  
倉本一宏 教授

目的 ホーチミン市国家大学人文社会科学  
大学にて基調講演

目的国 ベトナム

期間 平成三〇年二月一九日～二一日

安井眞奈美 教授

目的 国立アジア文化殿堂にて学会に参加  
し発表、大原寺にて科研課題に関する視察

目的国 韓国

期間 平成三〇年二月二一日～二四日

ジョン・ブリーン 教授

目的 ケンブリッジ大学にて科研課題に関  
する文書等の調査及び学会に参加し発表、  
ロンドン大学東洋アフリカ研究学院  
(SOAS)歴史学部にて研究発表、大英博物  
館及び大英図書館にて調査

目的国 イギリス

期間 平成三一年一月五日～一六日

荒木浩 教授

目的 パリ市立チュルヌスキ美術館等にて

調査及び情報収集、パリ日本文化会館にて  
セッション長としてシンポジウムに参加

目的国 フランス

期間 平成三一年一月九日～一四日

坪井秀人 教授

目的 東国大学校にてワークショップに参  
加、國文學(韓国文学)研究室及び付属図  
書館にて資料調査

目的国 韓国

期間 平成三一年一月二一日～二四日

小松和彦 所長

目的 ジャワハルラール・ネルー大学にて  
講義及び付随業務

目的国 インド

期間 平成三一年二月一〇日～二三日

坪井秀人 教授

目的 「国際日本研究」コンソーシアムに  
係るネットワーク形成のため調査及び情報  
収集

目的国 チェコ、ドイツ

期間 平成三一年二月二四日～三月四日

伊東貴之 教授

目的 「国際日本研究」コンソーシアムに係るネットワーク形成のため調査及び情報収集

目的国 チェコ

期間 平成三十一年二月二四日～三月一日  
榎本涉 准教授

目的 「国際日本研究」コンソーシアムに係るネットワーク形成のため調査及び情報収集

目的国 チェコ

期間 平成三十一年二月二四日～三月一日  
倉本一宏 教授

目的 ウィスコンシン大学マディソン校にて講演、共同研究及び調査

目的国 アメリカ

期間 平成三十一年三月一日～一七日  
荒木浩 教授

目的 メトロポリタン美術館にて科研テーマ及び会議テーマに関連する調査、コンソーシアムにて学術会議に参加し発表

目的国 アメリカ

期間 平成三十一年三月一三日～一八日  
関野樹 教授

目的 サンディエゴ人類博物館にて展示解説、関連資料等収集、サンディエゴ州立大学にて研究打ち合わせ、Sheraton Denver Downtown Hotelにて Association for Asian Studies (AAS) 2019 に参加

目的国 アメリカ

期間 平成三十一年三月一八日～二六日  
吳座勇一 助教

目的 Sheraton Denver Downtown Hotel にて Association for Asian Studies (AAS) 2019 に参加

目的国 アメリカ

期間 平成三十一年三月二〇日～二六日  
吉江弘和 助教

目的 Sheraton Denver Downtown Hotel にて Association for Asian Studies (AAS) 2019 に参加

目的国 アメリカ

期間 平成三十一年三月二〇日～二六日  
松田利彦 教授

目的 Sheraton Denver Downtown Hotel にて Association for Asian Studies (AAS) 2019 に参加、The United Church of Canada Archives にて資料調査、トロント大学にて資料調査及び教授等と面会

目的国 アメリカ、カナダ

期間 平成三十一年三月二〇日～三〇日  
パトリシア・フィスター 教授

目的 Sheraton Denver Downtown Hotel にて Association for Asian Studies (AAS) 2019 に参加

目的国 アメリカ

期間 平成三十一年三月二一日～二六日  
稲賀繁美 教授

目的 Sheraton Denver Downtown Hotel にて Association for Asian Studies (AAS) 2019 に参加し「国際日本研究」コンソーシアムに関する情報収集、コロラド大学にて准教授等と面会し「国際日本研究」コンソーシ

アムに関する情報収集

目的国 アメリカ

期間 平成三十一年三月二日～二九日

磯前順一 教授

目的 Sheraton Denver Downtown Hotel に

て Association for Asian Studies (AAS) 2019

に参加し助教等と面談、外国人研究者デー

タベース及び「国際日本研究」コンソーシ

アムに関する情報収集及び打ち合わせ、

ニューヨーク市立大学にて名誉教授と面

談、ニューヨーク大学にて教授等と面談、

コロンビア大学にて教授と面談し「国際日

本研究」コンソーシアムに関する情報収集

及び打ち合わせ

目的国 アメリカ

期間 平成三十二年三月二日～三〇日

楠綾子 准教授

目的 Sheraton Denver Downtown Hotel に

て Association for Asian Studies (AAS) 2019

に参加し助教等と面談、外国人研究者デー

タベース及び「国際日本研究」コンソーシ

アムに関する情報収集及び打ち合わせ、

ニューヨーク市立大学にて名誉教授と面

談、ニューヨーク大学にて教授等と面談、

コロンビア大学にて教授と面談し「国際日

本研究」コンソーシアムに関する情報収集

及び打ち合わせ

目的国 アメリカ

期間 平成三十一年三月二日～三〇日

安井眞奈美 教授

目的 北京民俗博物館にて大衆文化研究に

関する発表、研究討議及び情報交換

目的国 中国

期間 平成三十一年三月二日～二四日

## 訃報

梅原猛本センター初代所長・顧問が、二〇一九年一月一二日に逝去されました。  
享年九三。

謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。

所員活動一覽（二〇一八年四月一日～二〇一九年三月三一日）

荒木 浩

●論文

「独生独死」観の受容と「翻訳」論的問題―中世の孤独と無常をめぐる― 『物語研究（特集「翻訳」）』一八号 物語研究会 二〇一八年四月 三頁～一二頁（依頼論文・査読付き）

「海外での古典研究と教育―その実践と展望について」『ベトナムにおける日本語教育と日本研究―人材育成のための連携可能性を巡って』ハノイ 国家大学外国語大学 二〇一八年七月 二六頁～三八頁（依頼論文・査読付き）

“Rêve et vision dans la littérature japonaise classique: notes pour la lecture du Roman du Genji.” (フランス語) *Extrême-Orient Extrême-Occident* 42, Presses Universitaires de Vincennes, December 2018, pp. 73-98 (依頼論文・査読付き)

「源隆国の才と説話集作者の資質をめぐる検証―研究史再考をかねて―」倉本一宏編『説話研究を拓く―説話文学と歴史史料の間に―』思文閣出版 二〇一九年二月 一四二頁～一六一頁（依頼論文・査読付き）

「フキダシをめぐる夢の形象―中日交流の視点から」『古代学研究所紀要』第二七号 明治大学日本古代学研究所 二〇一九年三月 一三頁～一九頁（依頼論文・査読付き）

●その他の執筆活動

「文遊回廊」（連載二二回）『京都新聞』二〇一八年四月二六日号～二〇一九年三月二八日号（査読付き）

「対談 ラウンドテーブル・総合討議」（金水敏他と）『日本研究をひらく―「国際日本研究」コンソーシアム記録集2018』晃洋書房 二〇一九年三月

石上 阿希

●その他の執筆活動

「インタビュアー うらめしい春画」田中圭子著『うらめしい絵』誠文堂新光社 二〇一八年八月

「解説『女大楽宝開』と中国養生書」早川聞多翻刻、アンドリュウ・ガーストル英訳『日文研叢書57 日文研所蔵 近世艶本資料集成VI 月岡雪鼎3『女大楽宝開』国際日本文化研究センター 二〇一八年一月

「翻訳(分担執筆)『女大楽宝開』解説」早川聞多翻刻、アンドリュウ・ガーストル英訳『日文研叢書57 日文研所蔵 近世艶本資料集成VI 月岡雪鼎3『女大楽宝開』国際日本文化研究センター 二〇一八年一月

「インタビュアー 江戸の色つや、いまに彫り出す 春画の木版画復刻 京都の職人・研究者ら」『朝日新聞』 二〇一八年二月五日

「インタビュアー 傑作春画「袖の巻」全12図復刻プロジェクト」(高橋由貴子と)『週刊ポスト』 一月一八日・二五日合併号 二〇一九年一月

「ド・ロ版画/版木取蔵一覽」郭南燕編著『ド・ロ版画の旅ーヨーロッパから上海く長崎への多文化的融合』創樹社美術出版 二〇一九年三月

「解説『ビエールセルネ&春画』展」(ビエール・セルネ、浦上満と共著)『ビエールセルネ&春画』展図録』シャネルネクスホール

二〇一九年三月

「特集 研究をともに創る『日文研コレクション』 描かれた「わらい」と「こわい」ー春画・妖怪画の世界ー」展開催「人間文化研究機構基幹

研究プロジェクト ニューズレター きんぐし』vol.3 人間文化研究機構 二〇一九年三月

「インタビュアー 春画秘めやか美技 京都の職人ら名作復刻中」(高橋由貴子と)『中日新聞』 二〇一九年三月三〇日

石川 肇

●その他の執筆活動

「インタビュアー「抵抗の文学」ではなかった」『京都新聞』 二〇一八年四月二日

「インタビュアー 鳥瞰図・広がる領土」『京都新聞』 二〇一八年一〇月二二日

「戦前のツーリズムとは」『朝日新聞』(夕刊) 二〇一八年一〇月二五日

「インタビュアー 川端「古都」執筆に焦り」『読売新聞』他一二新聞掲載 二〇一九年二月三日他

## 磯田 道史

### ● 著書

『影の日本史にせまる…西行から芭蕉』（嵐山光三郎と共編）平凡社 二〇一八年八月 二一六頁

『戦乱と民衆』（倉本一宏、フレデリック・クレインス、呉座勇一と共著）講談社 二〇一八年八月 二〇四頁

『NHK英雄たちの選択江戸無血開城の深層』（NHK「英雄たちの選択」制作班と共編）NHK出版 二〇一八年九月 二二六頁

『日本史の探偵手帳』文藝春秋社 二〇一九年一月 二七二頁

『災害と日本人』（中西進と共編）潮出版社 二〇一九年三月 二五六頁

### ● 論文

「禁門の変―民衆たちの明治維新」磯田道史、倉本一宏、フレデリック・クレインス、呉座勇一著『戦乱と民衆』講談社 二〇一八年八月

八三頁～一一二頁

「後桜町天皇と光格天皇の譲位」御厨貴編著、井上章一、磯田道史、河野有理、前田亮介、佐々木雄一、佐藤信、五百旗頭薫、国分航士、原武

史著『天皇の近代 明治一五〇年・平成三〇年』千倉書房 二〇一八年九月 二一頁～四三頁

### ● その他の執筆活動

「古今をちこち」（連載一二回）『読売新聞』 二〇一八年四月一日～二〇一九年三月一三日

「書評 後藤典子著『熊本城の被災修復と細川忠利―近世初期の居城普請・公儀普請・地方普請―』」『毎日新聞』 二〇一八年四月一五日

「対談（耕論）歴史奪う、公文書改ざん」『朝日新聞』 二〇一八年四月二五日

「次世代リーダー像は」『毎日新聞』 二〇一八年六月五日

「書評 ブレット・キング著、上野博訳『拡張の世紀』」『毎日新聞』 二〇一八年六月一〇日

「書評 刑部芳則著『公家たちの幕末維新 ベリー来航から華族誕生へ』」『毎日新聞』 二〇一八年七月二二日

「書評 鈴木董著『文字と組織の世界史 新しい「比較文明史」のスケッチ』」『毎日新聞』 二〇一八年九月二日

「そろばんが語る 津波の記憶」『朝日新聞』（夕刊） 二〇一八年一〇月四日

- 「書評 今泉忠明監修、丸山貴史著『わけあって絶滅しました。世界一おもしろい絶滅したいきもの凶鑑』『毎日新聞』二〇一八年一〇月一四日
- 「対談 先人の知恵 防災に」(加藤朝胤と)『読売新聞』二〇一八年一月二一日
- 「書評 J・ドナルド・ヒューズ著、村山聡・中村博子訳『環境史入門』『毎日新聞』二〇一八年一月二五日
- 「対談 日本でイノベーション起こすには 明治維新一五〇年」(斎藤茂と)『日経産業新聞』二〇一八年一月三〇日
- 「インタビュー (おやじのせなか) 磯田道史さん シーツかぶり登場、奇妙な男」『朝日新聞』二〇一八年二月九日
- 「インタビュー 日本の針路 見据えて」『産経新聞』二〇一九年一月一日
- 「インタビュー 防災とは嫌われる決断」『読売新聞』二〇一九年一月六日
- 「書評 美濃部由紀子著『志ん生が語るクオリティの高い貧乏のススメ 昭和のように生きて心が豊かになる二五の習慣』『毎日新聞』二〇一九年一月二七日
- 「日本人とお金 来し方行く末」『日本経済新聞』二〇一九年二月一三日
- 「磯田道史が語る仕事―興味を追って仕事の核に」(連載四回)『朝日新聞ひろば』二〇一九年二月二一日〜二〇一九年二月二四日
- 「『梟の城』作家ら語る」『読売新聞』二〇一九年二月二二日
- 「書評 辻惟雄著『十八世紀京都画壇 蕭白、若冲、応挙たちの世界』『毎日新聞』二〇一九年三月一〇日
- 「インタビュー 改元に思う」『産経新聞』二〇一九年三月二〇日

## 磯前 順一

### ● 著書

『希望の歴史学——藤間生大著作論集』(藤間正大著、山本昭宏と共編) ぺりかん社 二〇一八年八月 三六八頁

### ● 論文

“Transcendence and the Process of Subjectification, and then Sustainability—On Prasenjit Duara’s ‘The Crisis of Global Modernity: Asian Traditions and A Sustainable Future,’” *Yijiang Zhong eds., Religious Studies Review* 44(2), Rice University, June 2018, pp. 183–190

「宗教概念論」から「宗教主体化論」へ―島蘭進と安丸良夫の金光論を通して』『平和研究』第49号 早稲田大学出版部 二〇一八年七月  
四七頁〜六二頁

「津波に吞まれて―否認とナルシズムの日本社会」坪井秀人、シュテフィ・リヒター、マルティン・ロート編『世界のなかの〈ポスト311〉  
ヨーロッパと日本の対話』新陽社 二〇一九年三月 六五頁〜九六頁

●その他の執筆活動

「インタビュー 一〇五歳歴史学者、三一年ぶり単著 編者の磯前順一・日文研教授に聞く」『京都新聞』二〇一八年一〇月二九日

「書評 『ひきこもりの国民主義』『アリーナ第21号』中部大学 二〇一八年一月

「書評 『グローバル近代の危機…アジアの伝統と持続可能な未来』(鍾以江と共著)『アリーナ第21号』中部大学 二〇一八年一月

「メロデイなき爆撃音と表現衝動―2013年夏、シアトルの博物館にて」『シミ・ヘンドリックス伝説 (KAWADE 夢ムック 文藝別冊)』河出書房

新社 二〇一八年一月

「インタビュー 一〇五歳の歴史家 著作集 藤間生大さん「希望の歴史学」『読売新聞』(西日本版) 二〇一八年一月一〇日

「インタビュー 一〇五歳 衰えぬ研究意欲 論集「希望の歴史学」刊行 藤間生大さん(合志市)『熊本日日新聞』二〇一八年二月二日

「書評 荻原稔『井上正鐵門中・禊教の成立と展開』『週間読書人』二〇一九年一月二五号 二〇一九年一月

「インタビュー 探 老学者が託した歴史への「希望」『朝日新聞』(福岡版) 二〇一九年一月二二日

「エッセイ 藤間先生と希望の歴史学」『熊本近研会報』五六六号 二〇一九年二月

「エッセイ 藤間生大氏の討報」『日本歴史』第八五〇号 吉川弘文館 二〇一九年二月

「レポート 汪暉氏との対話」『週間読書人』二〇一九年二月一五号 二〇一九年二月

「ヘンター通信」汪暉氏と歩く被災地・被差別部落―新しい主体性の形成に向けて』『日文研』六二号 二〇一九年三月

伊東 貴之

●論文

“The Embodiment of the “Mind” in Neo-Confucianism: The Schools of Chu His (朱熹) and Wang Yang-ming (王陽明), and Concerning the Problem of Preceding Research” Contribution paper for WCP2018 • Beijing, WCP2018 • Beijing, August 2018, pp. 1-10 (査読付\*)

「戦後日本陽明学研究史と荒木見悟的位置」(中国語) 講座暨工作坊『明清禪儒滙通・方以智与覚浪道盛』中山大学哲学系・中山大学禅宗与文化研究院 二〇一八年九月 五三頁〜六七頁(依頼論文)

●その他の執筆活動

「大陸」へ／「大陸」から―東アジア規模で環流する文学と思潮【二〇一八年／中国文学・文化 年末回顧】『図書新聞』第三三八〇号 武久出版社 二〇一八年十一月

「項目執筆 東アジアの公共圏」社会思想史学会編『社会思想史事典』丸善出版 二〇一九年一月

「中国語圏における日本研究―日本学・日本語教育の現状と国際日本研究専攻での経験から」坪井秀人、白石恵理、小田龍哉編『日本研究をひらく―「国際日本研究」コンソーシアム記録集2018』晃洋書房 二〇一九年三月

稲賀 繁美

●論文

“Genèse et préhistoire des écosystèmes: « l’ère vers la vie » géologique et « le milieu » proto-biologique,” (フランス語) AUGENDRE Marie, LLORED Jean-Pierre, NUSSAUME Yann eds., *La mésologie, un autre paradigme pour l’anthropocène?*, Hermann, April 2018, pp. 265-273 (査読付\*)

「日本画の前衛を戦後世界美術史に定位する: マッシュュー・ラーキングの『パン・リアル』戦後日本画の前衛」博士論文公開発表会より「『あいだ』二二九号 あいだの会 二〇一八年四月 三四頁〜三八頁(依頼論文)

「A・K・クーマラスワミーの事績からアジアを再考する(上)」ダッカ・アート・サミット DAS 2018 (二〇一八年二月八日―一日)に招待されて「『あいだ』二四〇号 あいだの会 二〇一八年六月 一〇頁〜一四頁(依頼論文)

「A・K・クーマラスワミーの事績からアジアを再考する(下)」ダッカ・アート・サミット DAS 2018 (二〇一八年二月八日―一日)に招待されて「『あいだ』二四一号 あいだの会 二〇一八年七月 二六頁〜三五頁(依頼論文)

「藤田嗣治の「戦争画」再考：世界史・アジア史の視点から」『美術手帖』No. 1070 美術出版社 二〇一八年七月 一〇二頁～一〇七頁（依頼論文）

「ギュスターヴ・モローと亀」『図書』九月号 岩波書店 二〇一八年九月 二頁～七頁（依頼論文）

「柳沢史明『ヘングロ芸術』の思想文化史・フランス美術界からネグリチュードへ」黒人アフリカ世界の立体造形とその言説的観念史…ニグロ表象におけるトランス・アトランティックな「支配と抵抗のポリティクス」『あいだ』二四二号 あいだの会 二〇一八年九月 一四頁～一八頁（依頼論文）

「建国神話の海外受容から戦前期の海外日本展示へ…日仏美術学会・関西例会でのコメントから」『あいだ』二四三号 あいだの会 二〇一八年一〇月 二九頁～三九頁（依頼論文）

「日本美術と中国美術の〈あいだ〉（上）石橋財団国際シンポジウム（二〇一八年一月二日―四日）に出席して」『あいだ』二四四号 あいだの会 二〇一八年二月 三五頁～四三頁（依頼論文）

「日本美術と中国美術の〈あいだ〉（下）石橋財団国際シンポジウム（二〇一八年一月二日―四日）に出席して」『あいだ』二四五号 あいだの会 二〇一九年一月 二三頁～三一頁（依頼論文）

「冬のパリ・日本趣味関係美術展示の瞥見―装飾美術館 [Japan/Japonismes 2018] 展への批判的備忘録」『あいだ』二四六号 あいだの会 二〇一九年三月 一〇頁～一九頁（依頼論文）

●その他の執筆活動

「書評 持田季末子著『セザンヌの地質学―サント・ヴィクトワール山への道』」『図書新聞』三三四六号 二〇一八年四月

「歴史に学ぶ」傲慢さと「歴史を学ぶ」無力さとの落差について…『竹山道雄セレクション』（藤原書店）刊行記念シンポジウムより」『図書新聞』三三四七号 二〇一八年四月

「対談 一九五〇年代の「職場」から生活に根差した「歴史」が立ち上がる…『職場の歴史』関係資料集 全四巻』復刻の意義を問う」（竹村民郎と）『図書新聞』三三四九号 二〇一八年四月

「Word and Image 学会にいたるアンヌ・マリイ・クリスタンの若干の追憶―あとがきにかえて」マリアンヌ・シモンⅡ及川編『テキストとイ

メージ・アンヌ・マリ・クリスタンへのオマージュ』水声社 二〇一八年六月（査読付き）

『書評 田中修二著『近代日本彫刻史』』『週刊読書人』三二四二号 二〇一八年六月

「タケミカヅチはなぜタケミナカタに自らの手を握らせたのか?」『古事記「国譲り」の発話構造における神威発現の機制と策略』『図書新聞』三三五四号 二〇一八年六月

「オディロン・ルドンから武満徹へ」『閉じた眼』における夢の転生と霊の出現』『図書新聞』三三五七号 二〇一八年六月

「エッセイ 稽古所感」『かみはま合気道』二〇一八年度版 第二〇号 二〇一八年八月

『海賊史観 輪廻転生』そして華敵』『GA JAPAN 154』SEP-OCT 2018 エディター・エディター・トーキョー 二〇一八年九月

「ひとはいつ・いかにして親鸞によばれるのか」日本信仰思想史における宿命の周期律（前）』『図書新聞』三三三六九号 二〇一八年一〇月

「ひとはいつ・いかにして親鸞によばれるのか」日本信仰思想史における宿命の周期律（後）』『図書新聞』三三七〇号 二〇一八年一〇月

「葉の音、詩の韻が伝える生命の息吹」東洋的養生と西洋近代の療法とのへあいだ』『図書新聞』三三七九号 二〇一八年一二月

「エッセイ 「能動」と「受動」とのへあいだ」『稽古雑感』『赤門合気道』平成三〇年度 第五九号 二〇一八年一二月

「シンポジウム評」ジョン・ラファージュと東洋的霊性への開眼」初期北米ジャポニスムの一面』『ジャポニスム研究』第三八号 二〇一八年一二月

[Thoughts on a Symposium] "John La Farge and the Awakening to Eastern Spirituality: An Aspect of Early North American Japonisme," *Studies in Japonisme* No. 38, Society for the Study of Japonisme, December 2018

「ゾラとセザンヌ」「すれちがった巨匠」の交友をめぐる解釈のパラダイム・シフトにむけて』『図書新聞』三三八〇号 二〇一八年一二月

「観音像はいかに世界を救うか?」戦争と平和のきざしに立つ「平和祈念像」の桎梏』『図書新聞』三三八九号 二〇一九年三月

「『方丈記』の「世界文学」仲間入りに、夏目金之助はいかに関与したのか」ワーズワースの汎神論、H・D・ソローの隠遁生活の傍らに鴨長明を位置づける』『図書新聞』三三九〇号 二〇一九年三月

「センター通信」『日本の風』国際シンポジウムに参加して「大衆文化研究」の余白に』『日文研』六二号 二〇一九年三月

## 井上 章一

### ●著書

『パンツが見える。―羞恥心の現代史―』新潮社（文庫）二〇一八年五月 四八三頁

『日本の醜さについて―都市とエゴイズム―』幻冬舎 二〇一八年五月 二三五頁

『日本史のミカタ』（本郷和人と共著）祥伝社 二〇一八年九月 二六四頁

『京都、パリ―この美しくもイケズな街―』（鹿島茂と共著）プレジデント社 二〇一八年九月 二六九頁

『大阪的―「おもろいおばはん」は、こうしてつくられた―』幻冬舎 二〇一八年十一月 二四二頁

『ミッシュンスクールになぜ美人が多いのか―日本女子とキリスト教―』（郭南燕、川村信三と共著）朝日新聞出版社 二〇一八年十一月 二四七頁

### ●その他の執筆活動

「海の向こうで、日本を考える」『高校生と考える希望のための教科書―桐光学園大学訪問授業―』左右社 二〇一八年四月 二〇〇頁〜二二五頁

「インタビュー リニアいらんでしょ」『京都民報』二八三〇号 二〇一八年四月

「講演資料等 歴史の中の阪神タイガース―アンチ巨人が増えたわけ―」『遼』六七号 二〇一八年四月

「対談 隈、妹島はコンドルの上に花開いた―戦後建築を理解するために知っておくべき明治―終戦期の建築家―」（磯達雄と）『プレモダン 建築巡礼』二〇一八年四月

「インタビュー 女子大生と美人論」『大学ランキング・二〇一九年版』朝日新聞出版 二〇一八年四月

「井上章一の大阪まみれ」（連載四回）『産経新聞』二〇一八年四月二日〜二〇一八年四月二三日

「講演資料等 世界の中で京都を考える」『西陣医師会創立七〇周年記念誌』二〇一八年五月

「海の向こうで日本は」（連載三三回）『産経新聞』二〇一八年五月七日〜二〇一九年三月二一日

「インタビュー 霊柩車 あなた色の送り方―背景に業者の演出力―」『朝日新聞』二〇一八年五月一三日

- 「書評 この人に訊け」（連載六回）『週刊ポスト』二〇一八年六月八日～二〇一九年二月八日
- 「インタビュー 看板も京の景観も醜い」『京都新聞』二〇一八年六月二〇日
- 「長崎・出島の「女人禁制」」『サンデー毎日』二〇一八年七月
- 「夢分かち合い文化支える」『読売新聞』二〇一八年七月二〇日
- 「インタビュー 「芸術作品」といふ言い訳」『週刊ポスト』二〇一八年八月
- 「関西人の「東京ざらい」は一筋縄ではいかない」『SAPRO』五九九号 二〇一八年九月
- 「京都と文化庁」『KOKEN』六六一号 二〇一八年九月
- 「インタビュー 千年の都は「鬼門」と「天皇」で歩く」『サライ』六四一号 二〇一八年九月
- 「建築の王政復古——一八世紀末の再現王宮を、どうとらえるか——」御厨貴編著、井上章一、磯田道史、河野有理、前田亮介、佐々木雄一、佐藤信、五百旗頭薫、国分航士、原武史著『天皇の近代 明治一五〇年・平成三〇年』千倉書房 二〇一八年九月 一頁～二〇頁
- 「書評 胃袋の近代」『日本経済新聞』二〇一八年一〇月六日
- 「書評 遊郭に泊まる」『週刊文春』六〇巻四一号 二〇一八年一二月
- 「プロテスタント校はあなどれない——読者モデルを量産するわけ」井上章一、郭南燕、川村信三著『ミッションスクールになぜ美人が多いのか——日本女子とキリスト教——』朝日新聞出版社 二〇一八年一二月
- 「公共」支え合う社会に」（木ノ下智恵子、栗木智代、宮本又郎と共著）『読売新聞』二〇一八年一二月一六日
- 「The 30th Anniversary Symposium Held and Beyond 三〇周年のシンポジウムをおえて」NICHIBUNKEN NEWSLETTER No. 98 二〇一八年一二月
- 「解説 下村敦史著『告白の余白』」『幻冬舎』二〇一八年一二月
- 「解説 片山杜秀著『音楽放浪記 日本の巻』」『筑摩書房』二〇一八年一二月
- 「インタビュー 万博やってみなはれ」『朝日新聞』二〇一八年一二月七日
- 「インタビュー 大阪万博二〇二五」『毎日新聞』二〇一八年一二月一九日
- 「インタビュー 明治維新はブルジョワ革命」『読売新聞』二〇一八年一二月二〇日

「対談 古代」(倉本一宏と)『中央公論』二月号 二〇一九年一月

「インタビュー ホンマは「おもろない」大阪人」『週刊ポスト』二〇一九年一月

「なにわ商人の高度な文化に光をあてた」『遼』七〇号 二〇一九年一月

「書評 京都がわかる三冊―日本史の新常識」『週刊文春』六一巻一号 二〇一九年一月三日

「書評 給食の歴史」『日本経済新聞』二〇一九年一月五日

「世界の中で日本を考える」(連載三回)『みやぎ中央新聞』二〇一九年一月二八日～二〇一九年三月二五日

「ヤマトタケル研究の新しい可能性―同性愛と性別越境の比較をめぐって―」倉本一宏編『説話研究を拓く―説話文学と歴史史料の間に―』思

文閣出版 二〇一九年二月

「インタビュー レッテル上等 波に乗れ」『日経MJ』二〇一九年二月

「講演要旨 本でまなぶこと 街が教えてくれること」『国立国会図書館月報』六九五号 二〇一九年三月

「またも負けたか八連隊」『公研』五七巻三号 二〇一九年三月

「インタビュー 歴史街道クローズアップ」『歴史の旅人』九八号 二〇一九年三月

「講演要旨 洛中洛外歴史紀行」『微笑』三九号 二〇一九年三月

「書評 半歩遅れの読書術」(連載五回)『日本経済新聞』二〇一九年三月二日～二〇一九年三月三〇日

「鼎談 万博 関西に再び脚光」(池坊専好、松本正義と)『読売新聞』二〇一九年三月一日

## 牛村 圭

### ● 著書

『文明と身体』(編著) 臨川書店 二〇一八年一〇月 二九二頁

### ● 論文

「文明、身体、そしてオリンピック―大森兵藏『オリンピック式陸上運動競技法』の周辺」牛村圭編『文明と身体』臨川書店 二〇一八年一〇月

一三九頁～一七一頁

「東條英機の東京裁判」(福永清貴他と共著)『比較法制研究』四一号(篠原敏雄教授 追悼号) 国士館大学比較法制研究所 二〇一八年一二月  
一七七頁～二一七頁(依頼論文)

●その他の執筆活動

「五六年ぶりの宴のまえに―ふたたび迎える東京五輪」(屋山太郎他と共著)『日本戦略研究フォーラム季報』Vol.78 二〇一八年一〇月  
「インタビュー」「好奇心が育まれた」―母校をたずねる千葉県立船橋高『毎日新聞』二〇一九年一月一六日  
「センター通信」基礎領域研究「英文日本歴史研究書講読」を開講・担当して『日文研』六二号 二〇一九年三月

櫻本 渉

●著書

『石井正敏著作集二 遣唐使から巡礼僧へ』(石井正敏著、村井章介、河内春人と共編)勉誠出版 二〇一八年七月

●論文

「テムルの日本招諭と一山一寧・燕公楠」『史学研究』三〇〇号 広島史学研究会 二〇一八年七月 三〇頁～五八頁(依頼論文)  
「高麗文宗が求めた医師」倉本一宏編『説話研究を拓く―説話文学と歴史史料の間に―』思文閣出版 二〇一九年二月 六九頁～七三頁  
「東シナ海の航海を護る濟州島の羅漢」『歴博』二二三号 国立歴史民俗博物館 二〇一九年三月 七頁～一〇頁(依頼論文)  
●その他の執筆活動

「唐、宋、元時期」(中国語)金国平、貝武権編『双嶼港史料選編』日文巻 海軍出版社 二〇一八年五月

「日宋交流と禅僧」『中外日報』二〇一八年一〇月

「遣唐使廃止でも日中交流は花盛り」文藝春秋編『日本史の新常識』二〇一八年一一月

「日宋・日元貿易の展開」高橋典幸、五味文彦編『中世史講義―院政期から戦国時代まで』筑摩書房 二〇一九年一月

## 大塚 英志

### ● 著書

『大政翼賛会のメディアアミックス「翼賛一家」と参加するファシズム』平凡社 二〇一八年二月 三〇四頁

『手塚治虫と戦時下メディア理論 文化工作・記録映画・機械芸術』星海社 二〇一八年二月 四六三頁

### ● 論文

「下東みの助の運命―戦時下の編集的人間とその生き方―」早稲田文学会、大塚英志編『早稲田文学』二〇一八年四月 二一九頁～二三九頁

### ● その他の執筆活動

「エッセイ 妖怪学批判」(連載二回)『怪』二〇一八年四月～二〇一八年一〇月

「まんがでわかるまんがの描き方」(連載一〇回)(砂威・浅野龍哉と共著)『ヤングエース』二〇一八年四月～二〇一九年一月

「恋する民俗学者2ndシーズン」(第9話～第13話)(中島千晴と共著)『ComicWalker』二〇一八年四月～二〇一八年十二月

「書評 西田亮介『情報武装する政治』」『週刊ポスト』二〇一八年四月

「エッセイ 平成三〇年論第三回…アメ・ドラと終わらない「ごっこ」の時代」『ジセダイ』二〇一八年四月

「書評 與那覇潤『知性は死なない 平成の鬱をこえて』」『週刊ポスト』二〇一八年六月

「小説家井伏鱒二再考」『公明新聞』二〇一八年六月三日

「インタビュー 翼賛に通じる「共有」賛美」『朝日新聞』二〇一八年六月一五日

「エッセイ 平成三〇年論第四回…「停滞する今」のことを考えていたのではないが、考えていたことにする七月」『ジセダイ』二〇一八年八月

「書評 『手塚マンガで憲法九条を読む』」『週刊ポスト』二〇一八年八月

「戦時下、マンガを動員に利用」『朝日新聞』二〇一八年八月二日

「インタビュー 大塚英志氏が語るセゾングループと堤清二」(連載三回)『日経ビジネスオンライン』二〇一八年一〇月二三日～二〇一八年

一〇月二五日

「書評 『大江健三郎全小説3』」『週刊ポスト』二〇一八年十一月

- 「まんが訳 酒吞童子繪卷1・2」（山本忠宏ゼミと現代語訳・編著）『Comic Walker』二〇一八年一月二日  
 「書評 大塚英志『大政翼賛会のメディアミックス 「翼賛一家」と参加するファシズム』』『週刊ポスト』二〇一八年一月二日  
 「まんが訳 酒吞童子繪卷3」（山本忠宏ゼミと現代語訳・編著）『Comic Walker』二〇一九年一月  
 「インタビュアー 対話より共感で一体化、リスクは歴史で明らか」『朝日新聞』二〇一九年一月一日  
 「インタビュアー 感情が政権と一体化、近代に失敗しすぎた日本」『朝日新聞デジタル』二〇一九年一月二日

### 楠 綾子

#### ●その他の執筆活動

- 「自由で開かれたインド太平洋戦略」「従軍慰安婦問題合意」「日印原子力協定」「2016年日露平和条約締結交渉」「日米歴史和解（オバマ大統領の広島訪問、安倍首相の真珠湾慰霊訪問）」「日本への理解と信頼の促進に向けた取組」『イミダス「外交」2018年版』二〇一八年四月

### 倉本 一宏

#### ●著書

- 『現代語訳小右記6 三条天皇の信任』吉川弘文館 二〇一八年四月 三六六頁  
 『古代史から読み解く「日本」のかたち』（里中満智子と共著）祥伝社 二〇一八年五月 二四八頁  
 『尾駸の駒・牧の背景を探る』（六ヶ所村「尾駸の牧」歴史研究会編、共著）六一書房 二〇一八年七月 二五五頁  
 『日記で読む日本史3 宇多天皇の日記を読む』（監修、古藤真平著）臨川書店 二〇一八年八月 二七二頁  
 『日本史の論点』（中公新書編集部編、共著）中央公論新社 二〇一八年八月 二八八頁  
 『戦乱と民衆』（磯田道史、フレデリック・クレインズ、呉座勇一と共著）講談社 二〇一八年八月 二〇四頁  
 『現代語訳小右記7 後一条天皇即位』吉川弘文館 二〇一八年一月 三五七頁  
 『「ためし」から読む更級日記』（監修、石川久美子著）臨川書店 二〇一八年二月 二二六頁

『御堂閔白記』の研究』思文閣出版 二〇一八年二月 三八八頁

『日本史の新常識』（文藝春秋編、共著）文藝春秋 二〇一八年十一月 二二八頁

『内戦の日本古代史』講談社 二〇一八年二月 三四三頁

『説話研究を拓く―説話文学と歴史史料の間に―』（編）思文閣出版 二〇一九年二月 六〇〇頁

●論文

「藤原道長と馬、そして尾駿の駒―六ヶ所村「尾駿の牧」歴史研究会編、堀井佳代子と共著『尾駿の駒・牧の背景を探る』六一書房 二〇一八年七月 九五頁―一〇三頁

「白村江の戦と民衆―磯田道史、倉本一宏、フレデリック・クレインス、呉座勇一著『戦乱と民衆』講談社 二〇一八年八月 一〇頁―三一頁

「コノ話ハ蓋シ小右記ニ出シナラン」考―『小右記』と説話との間に―倉本一宏編『説話研究を拓く―説話文学と歴史史料の間に―』思文閣出版 二〇一九年二月 七七頁―一〇頁

●その他の執筆活動

「この国のかたちを考える―天皇について考える―「政治と権力闘争を考える」「戦争と外交を考える」倉本一宏、里中満智子著『古代史から読み解く「日本」のかたち』祥伝社 二〇一八年五月

「インタビュー 蘇我氏と藤原氏を繁栄させた「最新技術」』『文藝春秋』二〇一八年六月号 二〇一八年六月

「インタビュー なぜ、藤原氏は日本史の「主役」なのか？」『歴史REAL藤原氏』二〇一八年六月

「エッセイ 還暦ということ」『京都新聞』二〇一八年七月三日

「インタビュー 必要のなかった戦い・・・それでも日本は大きく変わった」『歴史街道』平成三〇年八月号 二〇一八年七月六日

「エッセイ 読書アンケート」『歴史書通信』二〇一八年九月号 二〇一八年八月

「対談 徹底討論 邪馬台国は「三世紀の明治維新」だ」（保立道久、寺沢薫と）『文藝春秋』二〇一八年九月号 二〇一八年八月

「解説 一五分で読む天皇の歴史」『人文ニュース』二一九号 二〇一八年八月

「エッセイ マイルスとコルトレイン」『京都新聞』二〇一八年八月二八日

- 「エッセイ 戦乱は民衆にとって何だったのか」『本』二〇一八年九月号 二〇一八年九月
- 「インタビュー 史書を訪ねて『御堂閔白記』」『読売新聞』二〇一八年九月一八日
- 「エッセイ 余は如何にして『御堂閔白記』研究者となりし乎」『鴨東通信』二〇一八年一〇月
- 「エッセイ タイガー・イズ・バック」『京都新聞』二〇一八年一〇月一〇日
- 「蘇我氏と藤原氏が繁栄させた「最新技術」」文藝春秋編『日本史の新常識』文藝春秋 二〇一八年一月
- 「壬申の乱の陰に「唐」VS「新羅」の戦争」文藝春秋編『日本史の新常識』文藝春秋 二〇一八年一月
- 「本当は激務だった平安貴族」文藝春秋編『日本史の新常識』文藝春秋 二〇一八年一月
- 「平安貴族がわかる3冊」『週刊文春』二〇一八年一二月
- 「エッセイ 私と東北と内戦と」『講談社 Web 現代経済』二〇一八年一二月
- 「インタビュー 史書を訪ねて『日本書紀』」『読売新聞』二〇一八年一二月二五日
- 「エッセイ 内戦の日本史」『京都新聞』二〇一八年一二月二七日
- 「対談 古代」（井上章一と）『中央公論』二月号 二〇一九年一月
- 「序」倉本一宏編『説話研究を拓く―説話文学と歴史史料の間に―』思文閣出版 二〇一九年二月
- 「千年前、日本が初めて侵攻された日―刀伊の入寇」『歴史街道』二〇一九年二月
- 「対談 日本史の“主役”をつかんだ藤原氏」（紺野美沙子と）『ひととき』二〇一九年二月

## フレデリック・クレインズ

### ● 著書

『戦乱と民衆』（磯田道史、倉本一宏、呉座勇一と共著）講談社 二〇一八年八月 二〇四頁

### ● 論文

「オランダ人が見た大坂の陣」磯田道史、倉本一宏、フレデリック・クレインズ、呉座勇一著『戦乱と民衆』講談社 二〇一八年八月 五三頁

“Jacques Speck in Hirado (1609-1621): laverend tussen handel en kaapvaart.” (オランダ語) Wim Boot ed, *Vergzichten: Nederlands-Japanse Vereniging Lustnambek, Uitgeverij Gingko, September 2018, pp. 11-35* (査読付き)

「機械論と蘭学者の身体観」牛村圭編『文明と身体』臨川書店 二〇一八年一〇月 六七頁〜九八頁

●その他の執筆活動

「インタビュー 「日本の歴史」オランダ目線で翻訳」『朝日新聞』二〇一八年五月二三日

「インタビュー 戦国から幕末 西洋人は見た 日文研 当時の図書収集し目録」『読売新聞』(夕刊) 二〇一八年七月一九日

「インタビュー 西洋文献で開国前知る」『京都新聞』二〇一八年八月一日

「大坂の陣の講和は、家康の陰謀だったのか？オランダの史料に問いを解く鍵がある」『現代ビジネス』二〇一八年九月

「リンスホーテン『東方案内記』標題紙(英語版、ロンドン、一五九八年刊)」「日文研」六一号 二〇一八年一〇月

呉座 勇一

●著書

『戦乱と民衆』(磯田道史、倉本一宏、フレデリック・クレインスと共著) 講談社 二〇一八年八月 二〇四頁

●論文

「初期室町幕府には、確固たる軍事制度があったか？」亀田俊和編『初期室町幕府研究の最前線』洋泉社 二〇一八年六月 三〇頁〜四六頁 (査読付き)

「応仁の乱と足軽」磯田道史、倉本一宏、フレデリック・クレインス、呉座勇一著『戦乱と民衆』講談社 二〇一八年八月 三三頁〜五一頁

「室町の「政事」と「揆」前田雅之編『画期としての室町 政事・宗教・古典学』勉誠出版 二〇一八年一〇月 二七頁〜五一頁 (査読付き)

「戦国の動乱と「揆」高橋典幸、五味文彦編『中世史講義―院政期から戦国時代まで』筑摩書房 二〇一九年一月 二二七頁〜二三二頁 (査読付き)

「十五世紀の伏見稲荷社に関する雑考」『朱』六二号 伏見稲荷大社 二〇一九年一月 二一頁～二五頁（依頼論文・査読付き）  
 「足利安王・春王の日光山逃避伝説の生成過程」倉本一宏編『説話研究を拓く―説話文学と歴史史料の間に―』思文閣出版 二〇一九年二月  
 一七二頁～一七八頁

●その他の執筆活動

「エッセイ 歴史の世界もフェイクニュースだらけ…巷に蔓延る「陰謀論」に騙されるな」『Voice』486号 二〇一八年六月  
 「現代のことば」(連載五回)『京都新聞』二〇一八年七月一七日～二〇一九年三月五日  
 「対談 「陰謀論」蔓延 ゆがむ歴史」(細谷雄一と)『読売新聞』二〇一八年八月二〇日  
 「呉座勇一の歴史家雑記」(連載二七回)『朝日新聞』二〇一八年九月三日～二〇一九年三月二五日  
 「書評 早島大祐著『徳政令』」『茨城新聞』二〇一八年一〇月七日  
 「対談 歴史と現代を捉える新たな視座」(井出明と)『潮』七二〇号 二〇一九年二月  
 「インタビュー 歴史学者・呉座勇一氏「先見えず」中世と類似―平成って」『日本経済新聞』(夕刊) 二〇一九年二月四日  
 「エッセイ 史料を読むということ」『日文研』六二号 二〇一九年三月

小松 和彦

●著書

『鬼と日本人』KADOKAWA 二〇一八年七月 二七二頁  
 『妖怪たちのいるところ』KADOKAWA 二〇一八年一月 九六頁

●論文

「二つの「一つ家」―国芳と芳年の「安達ヶ原」をめぐるって」徳田和夫編『東の妖怪・西のモンスター 想像力の文化比較』勉誠出版 二〇一八年七月 四六頁～七二頁（査読付き）  
 「日本の鬼とはなにか」『한·일 도깨비의 세계문화적 위상』을 위한 국제 세미나 “심진강 도깨비마을” 二〇一八年一〇月一日 七頁～一九

頁 (依頼論文)

「동아시아 문화사 재고」, '요괴적인 것' 과 실크로드 (東アジア文化史再考—「妖怪的なもの」とシルクロード—) (韓国語) 한양대일본학 국제미교연구소 (漢陽大日本学国際比較研究所) 『요괴 또 하나의 일본의 문화코드』 (妖怪 もう一つの日本の文化コード) 『역락』 二〇一九年二月 一七頁〜二九頁 (査読付き)

●その他の執筆活動

「日本研究の総本山・国際日本文化研究センター三〇年の軌跡」『nippon.com』 二〇一八年四月

「インタビュー 千二百年の都にうごめく魍魎魍魎の世界 もうひとつの京都の扉を開ける」『裏・京都の魔界を往く』 二〇一八年四月

「解説 焼畑をする最後のむら・椿山の貴重なエスノグラフィ」『焼畑のむら 昭和四五年、四国山村の記録』 二〇一八年四月

「インタビュー 日本文化の根っこを探る」(櫻田謙悟他と) 『リーダーの本棚 決断を支えた一冊』 二〇一八年五月

「解説」『真景累ヶ淵』 二〇一八年六月

「インタビュー 特集「刀剣怪談」『幽』VOL. 29 二〇一八年六月

「こころの玉手箱」(連載五回) 『日本経済新聞』(夕刊) 二〇一八年六月四日〜二〇一八年六月八日

「インタビュー 私の時間デザイン 日本人の意識と文化の深層に根差す妖怪、そして時間・空間」(張士洛と) 『時間デザイン』 二〇一八年八月

「郷土史家が書き留めた戦後京都市域の歳時記・風俗誌」『緑紅叢書(パンフレット)』 二〇一八年九月

「エッセイ 妖狐をめぐる多義的で豊饒な伝承世界」『TAKARAZUKA』 二〇一八年一〇月

「インタビュー 水木しげるの大先生の未発表原稿をまとめた『妖怪たちのいるところ』刊行! 小松和彦先生インタビュー」『怪』vol. 0053 二〇一八年一二月

「対談 新春対談 時代を語る」(こころの史代と) 『京都新聞』 二〇一九年一月三日

「講演資料等「玉箱」に ついて」『東アジア文化都市 2018 金沢展覧会「工芸×霊性」』 二〇一九年三月

## 白石 惠理

## ● 著書

*Reevaluating Translation as a Driving Force of Scholarship* (『国際シンポジウム「翻訳の再評価…学問を深める原動力」報告書』) 国際シンポジウム 52 (パトリシア・フィスター監修、リン・リックスと共編) 国際日本文化研究センター 二〇一九年二月 二八〇頁

『日本研究をひらくー「国際日本研究」コンソーシアム記録集2018』(坪井秀人、小田龍哉と共編) 晃洋書房 二〇一九年三月 一九六頁

## ● 論文

「第四章 ド・ロ版画にみる日本イメージの受容と展開」郭南燕編著『ド・ロ版画の旅ーヨーロッパから上海く長崎への多文化的融合』創樹社 美術出版 二〇一九年三月 一〇九頁〜一三九頁

## ● その他の執筆活動

「持続可能な「情報発信」をめざして」NICHIBUNKEN NEWSLETTER No. 97 二〇一八年七月

## 関野 樹

## ● 論文

「デジタル歴史地名辞書の公開とその活用」『研究報告人文科学とコンピュータ (CH)』2018-CH-118 (9) 二〇一八年八月 一頁〜四頁

“Representation and comparison of uncertain temporal data based on duration” Proceedings of 2018 Pacific Neighborhood Consortium Annual

Conference and Joint Meetings (PNC), October 2018, pp. 58-63 (査読付き)

「Linked Data におけるあじまな時間の記述」『じんもんこん2018 論文集』二〇一八年十一月 三〇三頁〜三〇八頁 (査読付き)

## ● その他の執筆活動

「人文情報学」の研究環境を考える『研究報告人文科学とコンピュータ (CH)』2018-CH-117 (13) 二〇一八年五月

「時間とオープンデータ」NICHIBUNKEN NEWSLETTER No. 98 二〇一八年十二月

「エッセイ データベースからデータへ」『日文研』六二号 二〇一九年三月

「対談 正確なものさしを作る者と曖昧なものさしを活かす者」(中塚武と)『Humanity & Nature Newsletter (地球研ニュース)』No.76  
二〇一九年三月  
「歴史データにおける時空間情報の活用」国立歴史民俗博物館監修、後藤真・橋本雄太編『歴史情報学の教科書』二〇一九年三月

## 瀧井 一博

### ●論文

「伊藤博文」筒井清忠編『明治史講義【人物編】』筑摩書房 二〇一八年四月 九九頁～一一二頁

「開港期神戸と初代兵庫県知事伊藤博文」『神戸市史紀要 神戸の歴史』第二七号 二〇一八年二月 三頁～二七頁(依頼論文)

### ●その他の執筆活動

「政治学の古典を読む(二三) 明治日本への叛逆(田中角栄『日本列島改造論』日刊工業新聞社、一九七二年)」「究」第八六号 二〇一八年五月

「シユタイン詣で」を教えてください人『遼』第六八号 二〇一八年七月

「現代のことば」(連載四回)『京都新聞』二〇一八年七月二六日～二〇一九年一月二九日

「政治学の古典を読む(二四) 神話の政治化への理性の挑戦(エルンスト・カッシーラー(宮田光雄訳)『国家の神話』講談社学術文庫、

二〇一八年)」「究」第八九号 二〇一八年八月

「書評 湯川文彦『立法と事務の明治維新—官民共治の構想と転換—』」『史学雑誌』第一二七編第一〇号 二〇一八年一〇月

「政治学の古典を読む(二五) 『正統』をめぐる争い(美濃部達吉『憲法講話』ゆまに書房、二〇〇三年)」「究」第九二号 二〇一八年十一月

「政治学の古典を読む(二六) 創設の政治学(ハンナ・アレント(志水速雄訳)『革命について』ちくま学芸文庫、一九九五年)」「究」第九五号

二〇一九年二月

「センター通信」第五三回国際研究集会「世界史のなかの明治/世界史にとっての明治」を実施して『日文研』二〇一九年三月

## 坪井 秀人

## ● 著書

- 『戦後日本を読みかえる1 敗戦と占領』(編著) 臨川書店 二〇一八年六月 二八八頁  
 『戦後日本を読みかえる6 バブルと失われた二〇年』(編著) 臨川書店 二〇一八年六月 二六四頁  
 『戦後日本を読みかえる2 運動の時代』(編著) 臨川書店 二〇一八年七月 二二二頁  
 『戦後日本を読みかえる5 東アジアの中の戦後日本』(編著) 臨川書店 二〇一八年七月 二七六頁  
 『戦後日本を読みかえる3 高度経済成長の時代』(編著) 臨川書店 二〇一九年三月 二二〇頁  
 『戦後日本を読みかえる4 ジェンダーと生政治』(編著) 臨川書店 二〇一九年三月 二九四頁  
 『世界のなかの〈ポスト311〉 ヨーロッパと日本の対話』(シュテフィ・リヒター、マルティン・ロートと共編) 新曜社 二〇一九年三月 三三八頁

『日本研究をひらくー「国際日本研究」コンソーシアム記録集2018』(白石恵理、小田龍哉と共編) 晃洋書房 二〇一九年三月 一九六頁

## ● 論文

- 『「月に吠える」は吠え続ける』『SAKU (萩原朔太郎研究会会報)』vol.83 二〇一八年五月 五四頁〜七五頁(依頼論文)  
 「序言」坪井秀人編『戦後日本を読みかえる1 敗戦と占領』臨川書店 二〇一八年六月 一頁〜九頁  
 「序言」坪井秀人編『戦後日本を読みかえる6 バブルと失われた二〇年』臨川書店 二〇一八年六月 一頁〜七頁  
 「ポストバブルの「アブジェクト」ー『キッチン』から『OUT』へ」坪井秀人編『戦後日本を読みかえる6 バブルと失われた二〇年』臨川書店 二〇一八年六月 一三三頁〜一六三頁  
 「序言」坪井秀人編『戦後日本を読みかえる2 運動の時代』臨川書店 二〇一八年七月 一頁〜九頁  
 「序言」坪井秀人編『戦後日本を読みかえる5 東アジアの中の戦後日本』臨川書店 二〇一八年七月 一頁〜一二頁  
 “Hetz und Mund und Tat und Terrorismus”, Alexander Murphy (translator), *Inter-Asia Cultural Studies* 19, October 2018, pp. 526-535 (依頼論文・査読付き)

“Listening to Poetry: The Call of the Poetry Reading Record”『国立国会図書館歴史的音源ウェブ 사이트』二〇一九年三月(依頼論文)

「エビローグ」坪井秀人、シュテフィ・リヒター、マルティン・ロート編『世界のなかの(ポスト3.11)』ヨーロッパと日本の対話』新曜社  
二〇一九年三月 三二五頁〜三三五頁

「生者と生きる―(ポスト3.11)の死者論言説」坪井秀人、シュテフィ・リヒター、マルティン・ロート編『世界のなかの(ポスト3.11)』ヨーロッパと日本の対話』新曜社 二〇一九年三月 一六九頁〜一八九頁

「序言」坪井秀人編『戦後日本を読みかえる3 高度経済成長の時代』臨川書店 二〇一九年三月 一頁〜九頁

「序言」坪井秀人編『戦後日本を読みかえる4 ジェンダーと生政治』臨川書店 二〇一九年三月 一頁〜九頁

●その他の執筆活動

「解説 概観二〇一七年 日本文学《近代》」日本文藝家協会編『文藝年鑑2018』二〇一八年六月

「戦後日本文化再考」を再考する」NICHIBUNKEN NEWSLETTER No. 97 二〇一八年七月

「강각의 근대소리・신체・표상」(韓国語訳：朴光賢、孫知延、辛承模、李承俊)어문학사 二〇一八年一月

パトリシア・フィスター

●著書

*Reevaluating Translation as a Driving Force of Scholarship* (『国際シンポジウム「翻訳の再評価：学問を深める原動力」報告書』) 国際シンポジウム

52 (監修 白石恵理、リン・リックス編) 国際日本文化研究センター 二〇一九年二月 二八〇頁

●論文

“Commemorating Life and Death: The Memorial Culture Surrounding the Kinzai Zen Nun Mugai Nyodai.” Karen M. Gerhart ed., *Women, Rites and*

*Objects in Pre-modern Japan*, Brill, June 2018, pp. 269–303 (査読付※)

“Nichibunken Monograph Series.” (パトリシア・フィスター監修、白石恵理、リン・リックス編) *Reevaluating Translation as a Driving Force of Scholarship* (『国際シンポジウム「翻訳の再評価：学問を深める原動力」報告書』) 国際シンポジウム 52 国際日本文化研究センター

二〇一九年二月 四七頁〜五二頁

## ジョン・ブリン

### ●論文

「明治天皇の勲章外交と宮廷文化の国際性」『季刊悠久』第一五三号 鶴岡八幡宮 二〇一八年五月 一〇五頁〜一二六頁（依頼論文・査読付  
\*）

“Lies and yet more lies! Fukusai Habian's 'On Shinto.'”, *Japanese Religion* 42:1:2, NCC Center for the Study of Japanese Religions, June 2018, pp. 87-105（依頼論文・査読付\*）

「近代天皇制と大麻問題」高木博志編『近代天皇制と社会』思文閣 二〇一八年一〇月 四〇五頁〜四三二頁（査読付\*）

「明治維新に見る伊勢神宮…空間的変貌の過程」岩田真美、桐原健真編『カミとホトケの幕末維新』法蔵館 二〇一八年一二月 二二九頁〜二五五頁（査読付\*）

「天皇と国民と神宮大麻…モノから歴史を考える」『歴史の理論と教育』150/151合併号 名古屋歴史科学研究会 二〇一八年一二月 二二頁〜三〇頁（依頼論文・査読付\*）

“El emperador ha habido”（スペイン語）*Vanguardia Dossier: 71 Japón debilidad y Fortaleza, Vanguardia*, December 2018, pp. 39-42（依頼論文・査読付\*）

### ●その他の執筆活動

「Japan Review 編集長の務め」『報告』第二回紀要編集者ネットワークセミナー』二〇一八年四月

「サー・ハリー・パークスと明治天皇」『維新の道』一七二号 霊山歴史館 二〇一九年一月

“On Translating Primary and Secondary Sources: The Authentic and the Accessible.”（パトリシア・フィスター監修、白石恵理、リン・リックス編）*Reevaluating Translation as a Driving Force of Scholarship*（『国際シンポジウム「翻訳の再評価」：学問を深める原動力」報告書）国際シンポジウム 52 国際日本文化研究センター 二〇一九年二月 四七頁〜一五九頁

*Japan Review* vol.32 (2019), ed., International Research Center for Japanese Studies, February 2019, 243 pages.

*Japan Review* vol.33 Special Issue: *War, Tourism and Modern Japan* (2019), John Breen, Andrew Elliott, Daniel Milne eds., International Research Center for Japanese Studies, March 2019, 297 pages.

## 古川 綾子

### ●その他の執筆活動

「吉本興業お笑い新時代（中）劇場が原点・芸も経営も、収益を超えるメリット」『読売新聞』二〇一八年七月一七日

## 細川 周平

### ●論文

「戦前のタップダンス界―国粹主義下のアメリカニズム」ボナヴェントゥーラ・ルペルティ編著『日本の舞台芸術における身体―死と生、人形と人工体』晃洋書房 二〇一九年三月 二二三頁～二四五頁

### ●その他の執筆活動

“Tien muziekmomenten die Shuhai Hosokawa's Leven veranderen, (オランダ語) *Tien muziekmomenten die mijn leven veranderen*, Deknipscheer, April 2018

「エッセイ 田中涙 meets 中村達也」『Realkyoto』二〇一八年七月

「エッセイ 打ち上げの定番として」『吉田屋とわたしたち』二〇一八年九月

「アイハウスで語る日系ブラジル文化」*NICHIBUNKEN NEWSLETTER* No. 98 二〇一八年十二月

「エッセイ ジャズる辞書―モダン昭和の流行語」『日文研』六二号 二〇一九年三月

「キネマ館の少女」『京都新聞』二〇一九年三月三日

## 前川 志織

## ● 著書

『動態としての「日本」大衆文化史 キャラクターと世界』（国際日本文化研究センタープロジェクト推進室として共編） 国際日本文化研究センタープロジェクト推進室 二〇一八年一〇月 七七頁

## ● 論文

「近代日本の広告図像における少女の表象とその受容」『DNP文化振興財団学術研究助成紀要』 二〇一八年一月 一四八頁～一五七頁（依頼論文）

「雑誌『時事漫画 非美術画報』にみるカリカチュアと図案」並木誠士編『近代京都の美術工芸…制作・流通・鑑賞』 思文閣出版 二〇一九年三月 三一七頁～三五〇頁

## ● その他の執筆活動

「近代日本のグラフィック広告にみる「キャラクター」と「世界」」国際日本文化研究センタープロジェクト推進室編『動態としての「日本」大衆文化史 キャラクターと世界』 二〇一八年一〇月

## 松田 利彦

## ● 著書

『第五一回 国際研究集会報告書』植民地帝国日本における知と権力』（編著） 国際日本文化研究センター 二〇一八年一〇月 四六頁

『植民地帝国日本における知と権力』（編著） 思文閣出版 二〇一九年二月 九四九頁

## ● 論文

「統治機構と官僚・警察・軍隊」日本植民地研究会編『日本植民地研究の論点』岩波書店 二〇一八年七月 一三頁～二二頁（査読付き）

「戦時期植民地朝鮮における防空体制の形成—警防団を中心に」『歴史評論』八二〇号 歴史科学協議会 二〇一八年八月 四六頁～五八頁

「知と権力」からみた植民地帝国—朝鮮史研究における成果と課題」松田利彦編『植民地帝国日本における知と権力』 思文閣出版 二〇一九年

二月 二三頁～六四頁

「志賀潔とロックフェラー財団―京城帝国大学医学部長時代の植民地朝鮮の医療衛生改革構想を中心に」松田利彦編『植民地帝国日本における知と権力』思文閣出版 二〇一九年二月 五二三頁～五六六頁

「一九五〇年代末～一九六〇年代 在日韓国人の民族統一運動―統一朝鮮新聞の分析を軸으로」(韓国語) 청암대학교 재일코리아연구소編『재일코리아의 歴史的認識과 役割』図書出版ソニン 二〇一九年二月 一八三頁～二一〇頁

「武断統治期 朝鮮の憲兵警察과 衛生行政―衛生組合을 中心으로」(韓国語) 韓国歴史研究会三・一運動一〇〇周年企画委員会編『三・一運動一〇〇年叢書』第3巻(権力과 政治) 휴머니스트 二〇一九年三月 一〇三頁～一四三頁(査読付き)

「震災と外国人マイノリティー―阪神淡路大震災と東日本大震災を比較して」坪井秀人、シュテフィ・リヒター、マルティン・ロート編『世界のなかの「ポスト311」』ヨーロッパと日本の対話』新曜社 二〇一九年三月 一二一頁～一三八頁

●その他の執筆活動

「書評 荻野富士夫『日本憲兵史―思想憲兵と野戦憲兵』(日本経済評論社、二〇一八年)」「図書新聞」三三五八号 二〇一八年七月

「近現代史の人物史料情報松井茂」(二〇一八年)『日本歴史』第八四三号 吉川弘文館 二〇一八年八月

「上内彦策」松井茂「水野鍊太郎」「佐藤剛藏」「明石元二郎」「芳賀榮次郎」(韓国語) 高麗大学校グローバル日本研究院在朝日本人情報辞典編纂委員会編『開化期・日帝強占期(二八七六～一九四五) 在朝日本人情報辞典』二〇一八年八月

「はじめに」松田利彦編『(第一一回) 国際研究集会報告書 植民地帝国日本における知と権力』二〇一八年一〇月

「序」「解説」松田利彦編『植民地帝国日本における知と権力』思文閣出版 二〇一九年二月

「鄭鍾賢―日本の帝国大学における朝鮮人留學生の状況と帝国知識の連続／非連続―東京帝国大学卒業生崔應錫、李萬甲の事例を中心に」(金玄と共訳) 松田利彦編『植民地帝国日本における知と権力』思文閣出版 二〇一九年二月

「序」坪井秀人、白石恵理、小田龍哉編『日本研究をひらく―「国際日本研究」コンソーシアム記録集2018』晃洋書房 二〇一九年三月

## 安井 眞奈美

## ●著書

『괴이와 신체의 일본문화—이계로부터 출산과 양육을 되문다 (怪異と身体の民俗学—異界から出産と子育てを問い直す)』민속원아르케복스 128 (김용의, 김희영, 송영숙, 주혜정, 최가진 (黃仁己)), 민속원 二〇一九年三月 三〇—一頁

## ●論文

「出産の「痛み」を語る声—陣痛から医療処置の痛みへ」橋弘文、手塚恵子編『文化を移す鏡を磨く—異人・妖怪・フィールドワーク』せりか書房 二〇一八年七月 二七頁〜二九三頁

“Where yokai enter and exit the human body: from medieval picture scrolls to modern folktales in Japan.” (Translated by Kristopher REEVES) *Studies in Japanese Literature and Culture* volume 2 人間文化研究機構 国文学研究資料館 二〇一九年二月 六一頁〜七二頁 (依頼論文)

『主婦之友』別冊附録にみる女性の身体」坪井秀人編『戦後日本を読みかえる4 ジェンダーと生政治』臨川書店 二〇一九年三月 一七二頁〜一九一頁

## ●その他の執筆活動

「エッセイ 妖怪とジェンダー—妖怪に性別はあるのか?」『怪』vol. 0052 二〇一八年三月

「解説 安井眞奈美著『怪異と身体の民俗学—異界から出産と子育てを問い直す』澤野美智子編著『医療人類学を学ぶための六〇冊—医療を通して「当たり前」を問い直そう』明石書店 二〇一八年四月

「死別の悲しみ 癒そう」『読売新聞』(夕刊) 二〇一八年四月二日

「別れの悲しみに寄り添い二一年—大切な人と共に生きた証」『産経新聞』(夕刊) 二〇一八年五月二五日

「解説 日本研究指南 (中国語) 『日本学研究』28 社会科学文献出版社 二〇一八年六月

「解説 フィールドワークからの視座」『文化を移す鏡を磨く—異人・妖怪・フィールドワーク』せりか書房 二〇一八年七月

「書評 沢山美果子『江戸の乳と子ども—いのちをつなぐ』『女性史学』二八号 二〇一八年一〇月

「エッセイ 中国旅客機の模型がもたらした国際交流」『日文研』六一号 二〇一八年一〇月

- 「身体イメージを探る―日本人の精神性と密接 妖怪の魅力に触れて」『京都新聞』他一二新聞掲載 二〇一八年一〇月二一日
- 「エッセイ 両性具有の妖怪たち」『怪』vol. 0053 二〇一八年一月
- 「報告 日文研のこれからを考える―清華大学人文社会科学学院 汪暉教授をお招きして」『国際日本文化研究センター (Webサイト)』  
二〇一九年一月
- 「日文研共同研究会「身体イメージの想像と展開」(安井・マルソー代表) 第四回「海外における身体研究の現状」を開催しました」『国際日本文化研究センター (Webサイト)』 二〇一九年二月
- 「エッセイ 金閔恕先生と天理大学考古学・民俗学研究室」『春の日に―金閔恕先生追悼文集』 二〇一九年三月
- 「解説 「海外における日本研究の動向と展望」の趣旨説明」『阪大グローバルクラスター報告書』 2 二〇一九年三月
- 「対談 ラウンドテーブル・総合討議」(金水敏他と)『日本研究をひらく―「国際日本研究」コンソーシアム記録集 2018』晃洋書房 二〇一九年三月

## 山田 奨治

### ●著書

『びわ湖のほとりで三五年続くすごい授業 滋賀大附属中学校が実践してきた主体的・対話的で深い学び』(滋賀大学教育学部附属中学校と共著) ミネルヴァ書房 二〇一八年九月 一七八頁

『改訂版 弓具の雑学事典』(日本武道学会・弓道専門分科会ほかと編著) 日本文芸社 二〇一九年二月 二八七頁

### ●論文

「遊び、祈り、売る―村上隆の〈仏教アート〉と〈ポスト311〉の文脈」坪井秀人、シュテフィ・リヒター、マルティン・ロート編『世界のなかの〈ポスト311〉 ヨーロッパと日本の対話』新耀社 二〇一九年三月 二八一頁〜三〇〇頁

### ●その他の執筆活動

「インタビュー JASRAC「音楽教室からも徴収開始」に猛反発」『東京スポーツ』 二〇一八年四月五日

「日本の禅、世界のZEN」高馬京子、松本健太郎編『越境する文化・コンテンツ・想像力 トランスナショナル化するポピュラー・カルチャー』ナカニシヤ出版 二〇一八年一〇月

「書評 グレゴリー・P・A・レヴィン『長い奇妙な旅 近代の禅、禅アート、その他の範疇』『日本研究』第五八集 二〇一八年一月一日

「インタビュー 海賊版サイト対策 マンガなど静止画にも ダウンロード禁止 副作用懸念」『朝日新聞』二〇一八年一月二日

「祝標 ダウンロード違法化拡大」『東奥日報』ほか一四紙以上 二〇一九年二月

「インタビュー DL違法化拡大」『弁護士ドットコムNEWS』二〇一九年二月

「講演資料等 愉悦を生きる人間く身体・文化・そして笑い」(林洋輔、森下伸也、瀧一郎と共著)『身体運動文化研究』Vol.24 No.1 二〇一九年三月

マルクス・リュッターマン

●著書

(共編) Japonica Humboldtiana 19(2017), (ドイツ語・英語) Harrassowitz Verlag, April 2018, 233 Pages.

劉 建輝

●著書

『日本浪漫派とアジアー保田與重郎を中心に』(吳京煥と編著) 晃洋書房 二〇一九年二月一八四頁

●その他の執筆活動

「エッセイ 明治維新に中国のお膳立て (ソフィア京都新聞文化会議619)」『京都新聞』二〇一八年八月一〇日

「インタビュー 日文研『外地』画像収集・新村出の海外絵はがき三千枚寄贈も」『京都新聞』二〇一八年九月二四日

「インタビュー 鳥瞰図・広がる領土」『京都新聞』二〇一八年一〇月二二日

「エッセイ 失われた『絆』を再構築することが日中相互理解への第一歩」『京都新聞』二〇一九年一月一日

「あとがき」 吳京煥、劉建輝編著『日本浪漫派とアジア―保田與重郎を中心に』晃洋書房 二〇一九年二月  
「エッセイ」 「受け継ぐ帝国の記憶」(比較文明学会第三九回関西支部例会「大連―重層する文明・往還する文化」) 『比較文明学会第三九回関西支部例会報告』 二〇一九年三月

日文研 六十三号

二〇一九（令和元）年九月三〇日発行

編集 倉本一宏、呉座勇一

発行 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国際日本文化研究センター

住所 〒610-1192 京都市西京区御陵大枝山町三丁目二番地

電話 (〇七五) 三三五―二二二二

ファックス (〇七五) 三三五―二〇九一

ホームページ <http://www.nichibun.ac.jp>

印刷 中西印刷株式会社